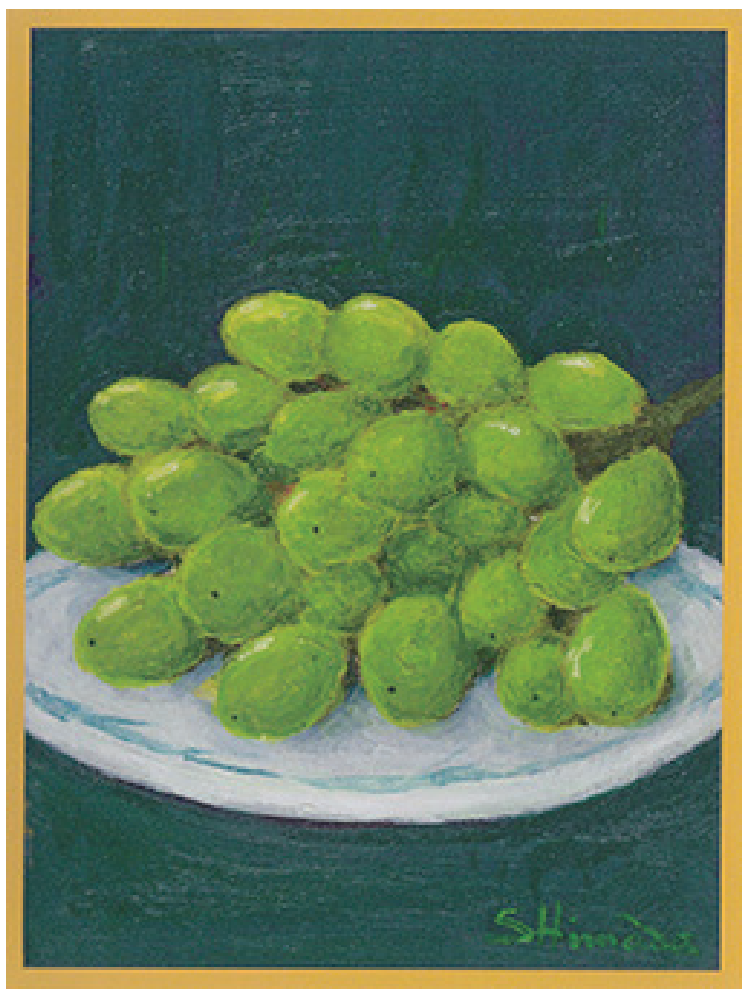


冬 雷

短歌雑誌

TOURAI

二〇二六年十一月一日発行（毎月一回、日発行）
第六十五卷第十一号（通巻七七七号）



11月号・2026年

応接室……新作五首

ながき夏

市川義和



異常つづくのどに気づきて検査受け咽頭癌と
診断くedar

八十まで大病なしで来しわれに二人に一人の
癌の巡りぞ

禁酒の命に素直に従ひこの夏はビールと無縁
の長きながき夏

癌を病むこの夏ぐうたら決め込みて在宅の午
後ひたすら昼寝

結社には癌サバイバー多くみると励ましくる
る歌友の嬉しも

〈香蘭編集委員〉

2026 年 11 月 目次

〈応接室……新作五首〉……………	市川義和…
冬雷の今後・来年へ向けてのお願い……………	編集委員会… 1
冬雷集……………	2
作品一……………	18
十一月集……………	34
作品二……………	42
作品三……………	52
九月号冬雷集評……………	桜井美保子…17
九月号作品一評……………	小林芳枝・藤田夏見…32
九月集評……………	鈴木やよい…38
九月号十首選（冬雷集・九月集）……………	39
九月号作品二評……………	井上菅子・江波戸愛子…40
九月号作品三評……………	山本三男・橋 美千代…50
九月号十首選（作品一・作品二・作品三）……………	59
大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記⑧……………	大山敏夫…60
歌集 / 歌書御礼……………	編集室・佐藤靖子…62

冬雷の今後・来年へ向けて

お願い

編集委員会

小誌はいよいよ三年計画の二年目へ向けて動きます。九月号でお知らせしました通り、お納め頂く会費がほんの少し上がります。また諸規定の一部が改定されます。その改定案を本号の「表紙4」に上書き記載しましたのでご覧下さるようお願いします。

最も大切な箇所は会費の値上げですが、そこを左に転記します。

- A 作品三欄は年額 一七〇〇〇円
 - B 作品二欄は年額 二〇〇〇〇円
 - C 作品一（冬雷集を含む）は年額 二四〇〇〇円
 - D 維持会員（会員の申出により定める）年額 三〇〇〇〇円
 - E 購読会員は年額 九〇〇〇円
- となります。

「*以上、二〇二七年一月一日より執

行する。」とありますが、既に収めてある会費については、更新までそのまま継続されます。一月一日以降の更新時に適用されるという意味です。現在の会費の改定は二〇二〇年一月でした。ご理解のほどお願い致します。

改革は誌面そのものの刷新も目指しますが、その細部決定は二〇二七年の内に打ち出します。現状サイズの「冬雷」を発送するための専用封筒の刷り置きが一度一年分あるので、この封筒を作り直す時期までに決定せねばなりません。

厳しい経済状況の内での雑誌作りなので、投稿可能な作品数を減らして全体ページを削減したらどうか、というご意見も届いておりますが、使用活字を小さくしたり詰め込んだりして、規模を縮小するかの方向は進むべき道と考えません。小誌は、二〇〇六年より印刷用データの完全内製化に舵を切り、独自の雑誌作りを推進して参りましたが、その目指したものは、誌面の読みやすさです。誌面の大型活字化（特に作品欄）をひたす

ら進めて来たのです。

いかなる事情が生じてもこれに逆行することは許されません。というより、更なる誌面の読みやすさに努力する所存です。取敢えず来年以降は、本文8ポイント活字ページを無くす方向へ進みます。作品欄も現状の一ページ十九行から、十八行へと段階的に進めます。会員、寄贈させて頂く歌壇の諸先輩友人諸氏におかれても高齢化が著しいものがあります。多くの方にとっては細かい活字は耐え難く眼も舁にも悪い影響を及ぼすかと案ぜられます。小規模短歌雑誌といえども、最も大切なことは毎月新しい作品を作り発表するという営為なのだから、それら作品を最大限尊ぶ方向での誌面作りを志したいと考えます。

また、小誌が独自に開発した冬雷短歌会文庫シリーズでは、会員が希望すればその歌集を文庫で自前制作することを応援しています。いずれは自分の歌集刊行を目指すという勇氣と自信を大切に育てたいと願っています。

冬雷集

映画に知る北海道開拓史

桜井 美保子 神奈川

Amazon の配信には無き古き映画DVDに観る『大地の侍』

一九五六年の映画なり当時のわれは九歳なりき

七十年経てこの映画に出会ふとは老年といふも面白きもの
官軍に負けて蝦夷に渡るより生きる道なしと決意の主従
原生林切り拓きゆく苦難のさま刀は抜かず農具を持ちて
藩主支へ先頭に立つ家老の役柳太朗の重厚な演技

「北海道ロケと東京で撮つてました」水野晴郎に柳太朗答ふ
配役の画面に大友柳太朗の「友」の文字には点打たれあり
原作の『石狩川』を読み始む電子書籍を画面に広げて

赤間 洋子 東京

九十一歳不安なしとは言へないがもう少し独居を続けるつもり
月曜は体操水曜は更紗染めやりたきことがあるは嬉しい
秋来れば公募展が待ちてをりまた藍染の作品制作
特製の麻布たたみ縫ひ絞り藍に浸して成果を待ちぬ
入選の通知届けば早々と我が子と教へ子に報告をする

近頃の悩みのひとつは物忘れメモしたけれど意味がわからず
家にゐる時テレビはいつもスイッチオン音聞こえれば淋しくはない
手作りが安心と思ひスーパ―へメモに無きもの買ふこと多し

兼目 久 栃木

55年ぶりに再開したり大阪万博久しぶりにテレビで見たり
あまりにも暑いせゐか散歩せず夫婦揃つて天を眺むる
半紙創作班はしつかりと心を大事に無心になるやうにと（高校書道講習会）
相撲人は身体を大切に怪我の無きやうに祈るばかりだ
「氷壁」とふ文字を淡墨にて墨書せんと紙に向かふ
使つてゐる多字数よりも小字数が使用の度合数倍まさる
朝起きて寒いと思ふぶる震へ茶の間のスイッチ入れて洋々
サッカーはイギリスで生まれしを世界中にて広がりしものを

森 藤 ふみ 東京

土砂降りの夜を娘の帰り来る晴雨兼用小さな傘で
ゴーヤの実を縦半分切ればしつかり種育ちをり
豚肉と卵と炒めたるゴーヤ苦味少し音たてて食む
この年も吾の生日祝ふとて娘二人とひと日を遊ぶ
けふは八幡様の大祭日神輿の渡御を見る事にする
地下道より地上に出ればワッショイの声の響きて神輿の通過す

最後尾は宮司の付きて宮神輿ゆつたり進み前との距離ひらく
気温少し下がりがりたる日々シクラメンの花茎伸ばしまとまりて咲く

四国の地

櫻井 一江 東京

瀬戸大橋わたり来りて彼の合戦「屋島」を望む乱無きこの世の
森林を分け入る如き列車より眼下に深き吉野川の碧

吉野川の遊覧船に寄り来たる赤トンボ数多つかず離れず

龍馬像仰ぎて下る桂浜寄せ来る波間に白砂の映ゆ

土佐に来て鰹のたたきの食し方大蒜スライスと塩にて美味なす

愛媛の字「えひめ」と仮名の看板の目立ち始める道後温泉への道

「ひとり旅」ツアーの醍醐味知る人の集まりなれば俄か友の輪

四国の地「讃岐と阿波と土佐と伊予」古称は堂々輝き見せて

有泉 泰子 ☆山梨

富士山の頂き目指して登りゆく人影の列遠くにみゆる

夕やみに富士登る人の列のみゆ友と登りし若き日思う

リュック背に仲間と旅せし若き日よ浮かんできたり青春の時を

後輩の誘いのありて九十歳の夫喜々として仕事に出かく

生き生きと迎える車に乗りこみて出かけゆく夫へいつてらっしゃい

夫は仕事へ吾もがんばれ買物へゆつくり歩めば青空迎う

訪ね来たる男孫兄弟筆とりて「春の決意」「質実剛健」と

父母眠る地を訪ね行かむ孫共に蒼空広がり緑の葉々舞う

青木 初子 神奈川

水やりを暑さに怠けし庭の木々春を迎へて芽の吹くもあり

新しき枝の芽吹けば其れでよし金柑の鉢に肥と水をやる

金柑の新枝増えきてこの年は駄目かと思ひし白き花咲く

花鉢に藁を敷き詰め肥をやりて三度目の花に緑の実の付く

緑濃き金柑の葉と実のいくつ育ちてをりぬ追肥そろそろ

まだ先と勝手に思ひし苗届くミニトマトの処分のんびり出来ず

朝食の前の止み間の三十分ブロッコリー苗の本植ゑ急ぐ

苗植うる六つの鉢の整ひて一日降るらんぼつぼつ始まる

吉田 綾子 ☆茨城

百四歳になりたる歌友「山崎さん」の名文達筆なる便りの届く

我が歌に歌友は里の家屋敷柿の木までも懐かしむなり

老いたる我を歌友は笑いつつ「まだまだ子供」と励まし呉れる

幼馴染の香典返しのお茶のかおり順次巡り来数多の思い出

幼児期に父を亡くし幼馴染は朗らかにして確り者なり

年々の土用の鰻を持ち呉れし幼馴染の笑顔が浮かぶ

雨風に悩まされたる鉢植えのトマト漸く膳を賑わす

完熟のトマトを狙うか早朝に鳥の鳴き声徐々に近付く

白内障の手術の成功信じつつ「もしもの」のことに怯える日々なり

中村晴美 茨城

鉢植ゑの高野槇の定まらぬ大雨降るたび根ごとに倒れ

大都市の名古屋は水の引けの良く地下に貯留の施設あるらし

大雨の台風シーズンこれからか車の運転低地を避けて

ガソリンの補助金尽きるが先なのか終はらぬ戦争半年過ぐる

雨続きやつと晴れ間の夏日なり高き空には蜻蛉横飛ぶ

傾きて家の奥へと陽の入りぬ暑き室内エアコン回す

目隠しにスカイペンシルお勧めとネット通販十二本買ふ

山口 嵩 福島

カウンターの隅で久々マルチーニ「いそしぎ」耳にぼうつといつとき

マスターと五分程度の政治談ともに危ぶむ総理の寝不足

二杯目はマンハッタンでバーをいで温む風うけ急ぎバス停

昼食を食べつつ見入る囲碁対局カレー一口石うつたびに

「これ、土産」手渡されたるモンブランさつそく珈琲雨ふる夕べ

夕食はクロワッサンとコーンスープ五時のケーキをしばし後悔

理不尽にICCを誹謗するトランプ庇ふか我が国総理

どつぷりと私欲に浸るトランプに己が私欲を絡める身内

橋本文子 鳥取

久々に大きな八百屋訪れて目に止まりたるクルクマの花

数段のうてなの先に軽やかに桃色の苞クルクマは咲く

クルクマは白と紅しま模様花びらの先に緑の残る

クルクマをスマホで見るとしやうが科のうこんの仲間と知りて驚く

庭縁こどもピーマン二株にあまた実りて秋が近づく

明子さん

酒向陸 江☆東京

懐かしき友より届く大きめの封書を開く胸躍らせて

高校時代新聞部でありし友八十過ぎて小冊子書く

若くして命落せる明子さんを偲びて書けるエッセイしみじみ

若き日は口外出来得ぬことも皆書きて供養となせる年かな

エッセイの感想語り旧交を深める旧友四人の集り

帰り来て一人しみじみ明子さんの成仏祈り読経をしたり

明子さんの笑顔の教室思い出し心はすぐに六十年前

天野克彦 大阪

哀れなる敦盛首塚見んと来つ夏の終りの須磨の山寺

源平の争ひごとのものがたり思ひ浮かべてめぐる境内

須磨・明石と聞くもうれしき名なりけりひかる源氏の隠棲どころ

ただひとり藤江の浦の浜風に吹かれておもふすでに亡きひと

人麻呂がむかし通ひし海峡を商船三井の大き船ゆく

おとづる人もあらねばこゑ高く人麻呂の歌朗唱したり
海峡の彼方に浮かぶ淡路島夕映えの下横たはる見ゆ
島陰の闇にちらほら灯し点く夕餉の支度の時刻なるらし

高 松 美智子☆ 栃木

ファン付きのベストを着たる宅配の青年の汗に深く一礼
六十分の休憩時間の十五分を冷房なき廊下のマッサージ機に憩う
フェンスを這うトカゲ青い尾ひからせて草なかにするり紛れ込みたり
精霊棚にほおずき灯し「いいちこ」と赤飯供える姑の新盆
盆すぎて確かに季節は移りたり秋雨前線ながく居座る
万年雪氷河も溶けて土石流ネパールの災禍人ごとでなし
顔つきが大人びたるか隣家の中学二年のど仏ふくらむ
ひと夏で背丈伸びたる少年は母の背を越し二期期迎える

原田泰治美術館

高 橋 説 子 栃木

原田泰治を知り初めて童画集を繰りては愛でし吾が二十代
美術館の存在も氏の逝去さへ知らず心に泰治の素朴画
半年先のツアーなれども即決す「六つの美術館を巡るバス旅」
青き諏訪湖のほとりに泰治の美術館つひに訪ひ来て胸の高鳴る
どんな絵も先づ空を描き海山を描きて小さく村びとを描く
手にしたる絵本『さだおばさん』から始まりぬ歌手さだまさしの泰治への想ひ

コンサートにさだが「案山子」を歌ふとき背景に大きく泰治の山の絵

わがファンのさだまさし氏と原田氏が相思相愛となるを嬉しむ
この窓に泰治もさだも立ちぬべし吾も眺めん平らかなる諏訪湖

大 塚 亮 子 東京

兄逝きて空き家となりたるわが生家雨戸閉ぢたる儘に建ちをり
墓参済ませ帰りに寄りぬわが実家兄とのおしやべり尽きる事なし
屋根裏に作つてもらひしわが部屋に鼠が出たと大騒ぎせし
わが部屋は気づけば物置小屋となり私の机は下に戻りぬ
一日では乾くこと無き濯ぎもの生乾きのまま家にて干しぬ
洗濯物の陰に隠れてかくれんぼ忘るるは無し思ひ出いくつ
生乾きの洗濯物にこてかける母の背中を見つつ眠りぬ
晴れた日は早起きをして洗濯をする母手伝ふ姉の後ろ手

ルーティーン

嶋 田 正 之 埼玉

早朝の涼しきうちに家を出てうすき汗かき戻り水風呂
残り湯に身体浸せば自づから言葉にならぬ声を発して
朝ごとのルーティーンこなし冷房の部屋に絵を描く油の匂ひ
週一度男等集ふピンシャンの会に顔出し新しき友
新しく友となりたる者集ひ時に酒酌みマイクを握る
来し方の辛き思ひを語りつつ己の言葉に涙する人

寒き地に生まれ売られて今のある人生を聴き返事につまる
口減らしの言葉聞きたる記憶あり目の前に聴くその体験を
遠き地の争ひごとと見てをれど身に及びくるガス代値上げ

江波戸 愛 子☆ 埼玉

わが夫と同窓生の詩吟の師まさよしちゃんと親しげに呼ぶ
突然に詩吟講師を辞めると言う娘さんの症状言いて

この月で詩吟を辞めると言う師匠ときおり見せる寂しげな顔
師のいない教室ならず辞める人他の教室へ移り行く人
鉢なかに植えたる茄子苗のびのびと育ちて開く花つぎつぎと
鉢二つ植えたる茄子の実大きさと形の違いはじめて気づく
朝取りの茄子焼き卓に食べながら夫の茄子を語りて止まず

橘 美千代 新潟

耳朶にダイヤのピアス埋没せる患者さん言ふ「切ってください」
拗ねてゐるやうに見えたる男の子アトピーの注射後に泣きはじむ
今朝ふれる車のハンドルひいやりとみあぐる空に秋は来たりぬ
アンスリウムの紅の苞わづかつ緑おびゆく葉に変はりゆく
一歳にならむ孫へのプレゼント選ぶはたのし女の子の服
一歳になる孫の誕生祝ひの日よろこび待つも日々の励みに
ゆれる風船はたくのみなる一歳児来年はきつと喜びくれむ

ブレイクあずさ☆ カナダ

暁の道路の真中を駆け抜けるコヨーテ一頭その銀色の尾
太陽の風吹く今宵のオーロラはいかに輝く天王星では
花花の絶えたる頃にアイビーの緑の花がひっそりと咲く
アイビーのつつましき花に花蜂は秋の最後の宴を開く

「バエトンの墜落」思う 未熟なる人類がいまAI手にする

太陽の戦車を御せずに地を焼きてバエトン撃たれき神の怒りに
膨大なる水と電気をむさぼりてデータセンター増殖してゆく

中 村 哲 也 宮城

変はり無き事を予想す我が問ひに母は胡瓜のならずを嘆く

台風 of 東北上陸予想あり鉢植ゑ寄せて傘立て仕舞ふ

台風は逸れるもひと日風強く山の日なれど出でずに籠る

普段見る車窓の眺めのその先の知らぬ眺めを動画に見たる

八月の十二のひと日荷物来ず電話も鳴らず注文あらず

八月の十三日の新幹線あらかた帰省も終はるか空けり

電柱の移動と共に祖母植ゑし紫陽花の株跡形も無し

鈴 木 やよい 東京

川挟む二つの地区で夏祭り炭坑節が兩岸に響く

コンサート終はりて外は強き雨靴濡れゆくも足取り軽し

何年も麝香揚羽は現れず蔓延り始む食草を抜く

丈高く川原を覆ふ夏草に吸ひ込まれゆく草刈り機の音
動物が食ひ散らせども一つだけ無事なる西瓜を両の手で撫つ
仕方なし八月なればと甘やかす意志弱き吾の歩数のグラフ
壁紙の貼り替へにいちり繋がらずテレビも電話もネットも使へず
通信の頼みの綱はスマホなりこれさへあれば何とか暮らせる
情報の少ない朝に届きたるいつもの新聞ほつと手に取る

飯嶋 久 子 ☆ 茨城

おそれいし線状降水過ぎしかと未明に目覚めテレビをつける
若き日に友と訪ねしプラハが流る友の消息絶えて久し
風雨の情報何もなく無事に過ぎたと只願いおり
若き友丹精こめて畑耕す四季の野菜豊かに育つ
三千歩わが一日の目標歩数友の畑その目標の中

「御自由にどうぞ」のそえ書きありて鋏そえあり心根ゆかし
独り居の会話なき日は野にいでて花と語らい鳥と語らう

飯塚 澄子 東京

店内に買物しつつ雨やどりすごい土砂降り人あまた待つ
十一円のビニール袋の大二つ求めて鞆と頭部を被ふ
降りつづく豪雨の中を傘を背に歩を進めつつ家へと向かふ

五時過ぎの土砂降りの中戻り来て玄関にどつと脱力をなす
日曜は横浜の孫六ヶ月の息子を連れ来て祝宴となる
一人息子二人の子を持ち孫三人親譲りの庭鬱葱の木々
祝宴の賑はひに触れ六箇月の曾孫は顔あげ体向けんとす

田端 五百子 岩手

炎天に怯えず一步踏み出だすからまる残暑ポストまでの道
足元に蚊遣香おきチリツチリツと線香花火の燃え尽きるを待つ
アメンボの長き手足を屈伸させ梅雨の晴れ間を手水鉢泳ぐ
堀割のよどむ流れに夕陽照り小皺の如くさざなみのたつ
江戸切子小ぶり器に盛られある素麺旨し一氣に啜る
夜来より雨降り出でて鎖樋流るる音の覚めて聞きをり
朝市に商ふ媼に隙あらばのたりはみ出す桶の水蛸
鼻歌も混せてガラスを磨きたる今日の朝日によく光るなり
稲刈りて束ねる仕草踊るなり老いら集まる慰安の舞台

山本 三男 ☆ 群馬

実のならぬ小さなレモンの木のありて時折アゲハがどこから来る
何匹もアゲハの幼虫育てきてアゲハのことを少し知りたり
夏休みすでに終わりにて散歩路に自転車で行く生徒らを見る
バッタ食うカマキリを庭に見付けたり近付きみれば食う音聞こゆ

齒の治療ようやく終わり気分良し散歩のための靴新調す
A Iの発達したる世の中に郵便将棋は消滅したり

このごろは夏の暑さの和らげば貧血気味の日々多くなる
自らの脳の画像を見る妻の背後に居たり付き添いに来て

江 藤 ひさ子 大分

何や彼や劣化の一途その速度受け入れざるを得ざる日々

一首とて詠めざるままに又もとて次の締め切り又も直前

詠めざるのでは無く詠まざるのだと吾に鞭打つ月々の短歌

丈高く桃色に咲くさるすべりの根方に白く咲く菫の花

戸部田 とくえ 福岡

花を活け気を取り直す暑さにも畑と庭への水やり努めてをり

向日葵の花を束ねて玄関に清々しさの限りもあらず

さうめんに浮ぶる氷の涼やかさふくめば暫し愉快になれり

水やりを行ふたびに井戸のある暮らしに思ひをこめて敬ふ

万年筆嫁のみやげの書きやすさ日々喜ぶそのたび感謝

キンセンカあまたの自生に驚きつつ移植に今朝は汗を流せり

苦瓜を朝の一品に調理して時にはジューズまれなる豊作

いくたびもみくじ大吉よみ直す「病は気長くととのふ安心」を

熊本の大地震に遭遇する深夜おそくに子の帰宅せり

稲 津 孝 子 福岡

楽譜の中の附録の紙の鍵盤で練習しにき習ひ始めて

盂蘭盆に車を軒に吊るす土地あり仏が早く帰ってくるため

背高ければ大きく平たき私の靴航空母艦と書く紙ありき

露草は抜く事ならずと読みたりき何に読みしや露草咲けり

躓きて石に突き指せし指の腫れの引ききてまた痛み出す

同居せる嫁不在にて母の味つくりてやりぬ胡瓜の浅漬

バザーにて手伝ふ母の白妙の割烹着の姿まぶしかりけり

帰省せる娘が話しつつ我の足の浮腫を見る指で押さへて

寸法を測り仮縫ひして孫が庭の地蔵の服ぬひくれつ

姉 川 素枝子 福岡

われの歌集よみて力になりたいと泣きくだされし人を忘れず

数十年心音ききし聴診器休息してゐる机の上に

聴診器医の情を伝へゐる数十年の主治医にてあれば

老いゆゑに医師を止めむとされるのか問はず語られぬ哀感ひとつ

解脱など関はりのなき顔をして人は歩めり日傘ひろげて

孫の家族に施設あふるる曾孫らはおはじき遊びして帰ったり

遠くより帰りし男孫の肥満腹さすりて所帯もてなど言はず

ばあちゃんと言えて瘦腕ひつばればまだ死ねぬなと思ひたりせり

白き孔雀が草叢にゐて畑にも来るといふ島遠く憧る
 台風の情報のみを知る島の久米島袖欲しき日ありき
 北国の畑にゴーヤは豊作で裾分け貰ふ太る三本
 真清水に茗荷洗へばほのかにも薄暗がりの土の匂ひす
 祖の姿を止めぬ人工栽培のえのき茸いつか祖と言はれむ
 鬼灯が赤く実らぬ盂蘭盆会庭も古りたり晩夏の光
 輪廻転生繰り返へしつと純白に浄められしか玉のかんざし
 真つ赤なTシャツ着てあの人は娶らずに終へむか喜寿をとうに過ぎ
 四億年前の鯨のつまびらか考古学には秘密通ぜぬ

過疎地行く二輦の電車の始動音蒸す構内に騒がしく立つ
 質問の有る人のみの出席といふ町内会の回覧板まはる
 酷熱の続きある夜半に遠雷の鳴りて降り出す雨のまばらさ
 初めての海外旅行に出づる孫飛行の恐れか朝の食細し
 幸田文の美文にありたる茄子あへは料理そのままが家の定番
 低空の飛ぶ虫ひと飲みわが池の鯉の跳躍に驚きゐたり
 持ち家のライフラインを切らずして友は施設を行き来すると言ふ
 接客の続く盂蘭盆終りたるみづみづと見る夏の夜の月

(☆印は新仮名遣い希望者です)

九月号 冬雷集評

桜井
美保子

窓の外にそよぐ緑の葉を見つ朝のひととき心の涼む
 何かと多忙な暮しの中でほっとするよ
 うな朝のひととき。窓から見える緑の葉
 は一連の歌から察するとゴーヤである。
 さりげなく自らの心を詠んだ結句に余情
 がある。

冷凍の枝豆あれど生を茹でる父の好物
 盆の供物に 森藤ふみ
 盆が来て父上の好物の枝豆を茹でて供
 えたという。初句、二句は冷凍の枝豆は
 家にあるけれどということだろうか。穏
 やかで温かい作品だ。

会合にやむなく仕事中断しスーツに着
 替へし夫の早わざ 櫻井一江
 一連の歌から夫君は機械仕事をされて
 いたとのこと。生業のほかにいろいろ重
 要な役を引き受けておられたのだろう。
 作業着姿からあつという間のスーツ姿。
 まさに「早わざ」だった。歌には連れ添っ

た人への信頼と尊敬の心がある。

コーラスの仲間の長は九十八歳母を思
 わせ我等みちびく 有泉泰子☆
 趣味のコーラスで楽しい時間を過ごし
 ておられる様子。人生百年時代を実感で
 きる作品だと思ふ。高齢ながら会の長と
 なって澁刺と仲間をまとめる人には母を
 思わせる優しさがある。

母親にマリアを覚ゆる柳太朗、四十で
 逝きし吾が母然り 山口 嵩
 大山敏夫氏の『大友柳太郎歌集「渚」
 鑑賞』の中の作品に共感した作者は若く
 して亡くなった母を思い出している。幼
 かった自分を優しく大きな愛で包んでく
 れた母もまたマリアのようだったと。

病院の夫の部屋に向かうとき足早くな
 るわたしに気づく 江波戸愛子☆
 入院中の夫君を見舞うために病室へ向
 かう作者は自然に足早になっている。そ
 のことにふと気づいたのである。自身の
 内面を見つめた下句が印象深い。
 人々の心のうちを覗くごと七夕飾りの
 短冊を読む 鈴木やよい

「人々」とあるので子供ばかりでなく大
 人も短冊に願いを書いたのだろう。人に
 よって願いもさまざま。「心のうちを覗
 くごと」としたのが面白い。作者独自の
 歌となっている。

九十を筆頭に後期高齢者社宅時代の付
 き合い続く 飯嶋久子☆
 若い頃、同じ社宅に住む者同士として
 助け合って来た友との交流が今も続いて
 いる。歌には力強い響きがある。これか
 らも良い交流を続けてほしい。

広告に「激安」の文字踊りおりまるで
 魔法の言葉のように 山本三男☆
 誰でも広告に「激安」とあれば引き付
 けられる。自分の目がその文字に反応し
 て買いたい気分になる。ユーモアがあり
 軽妙な一首である。

順調に実るトマト苦瓜に一言礼を言ひ
 つつ収穫す 戸部田とくえ
 手を掛けて育てたトマトや苦瓜が順調
 に実ったことは大きな喜びであろう。一
 言礼を言ひつつ収穫するという下句の表
 現に作者の温かなお人柄が出ている。

作品一

小林 芳枝 東京

夏休みに必ず泊まりにくる孫のゐて九月半ばにメールが届く
ぢいぢの墓に寄つて来たといふ孫と会ふスーパーの野菜売場の中で
好きな物それぞれ買つて食べやうね冷たい缶ビール一本づつで
十九歳まで二ヶ月余り学校はまだ夏休み中といふ九月中旬
成人に近くなりたる孫むすめ居れば明るむわが部屋の内
生日の来てこの朝は八十二歳シートツ広げて夏空に干す
掌に包めるほどのゴーヤの実切りつつをれば微かに香る
人参を少し合はせた炒め煮のゴーヤに白き擂り胡麻塗す
水溜りに輪が出来て消え出来て消え電線に白く雨粒並ぶ

正 田 フミエ ☆ 栃木

追熟のトマトを食めば果汁あふれ甘くうまいと家族は言いぬ
三月から育苗したるピーマンは皮がうすくてキンピラに合う
鉢上げのホオズキ育ち赤い実がちらほら現れ仕上げの追肥
赤い実がふくらみおれどホオズキの葉の虫喰い穴ふえて目立ちぬ
空調服の左右のファンの唸りつつ首や背中を心地好く冷やす

水やりや草取り収穫夏作業は空調服着て体調守る

白菜の早生と晩生の種まきに栽培の本を再度熟読す

白菜の晩生栽培を再挑戦わくわく種まき八月下旬

斉 藤 トミ子 ☆ 栃木

山頂にアサギマダラを見ついたりヒヨドリバナの蜜を吸いいる

この山でアサギマダラは初見参帽子にしばし止まりくれたり

この羽のどこに力を秘めいるや海越えて来しアサギマダラは

日本のこの花目指し飛び来しかアサギマダラはひらひらと舞う

頑張るねお互い様と声交す何時もの散歩は何時もの時間

若者は山駆け登る一歩ずつ踏みしめ登る我れの歩みは

子は親を案じくれたり温泉に連れて行かれて大いに笑う

浜 田 はるみ ☆ 埼玉

昨年は十月まで暑かりき秋は無きまま過ぎた気のする

涼しき日栗ご飯を思い出す爽やかな秋に食べたき物

地震に豪雨崖崩れ世界中に災害多く不安が募る

AIのデータセンターに電気も水も大量に必要と知る

地球上の電気や水不足に拍車をかける情報技術

イランの被爆学校で子供の死者百二十名というむごさ

前線のウクライナ兵の過酷さは薬物依存に落ち入り易し

いとうれし高木美帆さん受賞する国民栄誉賞拍手拍手を
父母のえにしと成りし『聖戦歌集』頁をめくる終戦の日に
千葉県に線状降水帯豪雨なり見舞の電話す九十九里の妹に
せみ時雨ふるを聞ける暑き日よけふは私の誕生日なり
連日の暑さに負けず球児たちの熱き戦ひ毎にいや増す
向日葵ものうぜん花も夏の花陽に真向ひて咲きつづける
フラフープ抱つこちゃんも在り懐かしき昭和時代に流行りしものよ

父の日記

林 美智子☆ 東京

終戦時の父の日記が残っており亡くなるまでの二年半分
旧字あり続字ありて読みずらき父の日記を姪が解説
コロナ中の三年使い根気よく父の日記を姪が活字に
八王子の空襲八月二日未明死傷者多数終戦二週間前
戦前の日記は家と共に焼け大量の書籍なかなか消えずと
家、家財すべて焼失困窮の二年半後に父は病死す
沖縄戦、広島、長崎、日本中、世界に及ぼした戦禍忘れず
近親者少なくなりて父の子は我ひとり今年父の日記編む

松 中 賀 代☆ 高知

恒例の湖水まつりに来る人の車連なり八千人の人垣

薄闇の湖面に流す灯籠はダム建設の犠牲者を慰霊

総立ちで櫓を囲み盆おどり夜空には星火花が開く

ざくざくと家内総出の稲刈りは昭和の景色今は見られぬ

毎朝に誰を呼ぶのか小綬鶏は「チヨットコイチヨットコイ」張り上げて鳴く

本 郷 歌 子☆ 栃木

出来ることは全部やったと妹は子の病の再発告げる

抗癌剤も放射線も手術も無駄だったと妹は泣く

出来るなら代わってやりたいと繰り返す妹に優しく言葉も言えず

言葉なく只一緒に涙する為す術のない我でありき

針治療にお灸もやってみるんだと妹は言う何でもやると

気休めと思いつつ言う妹に奇跡が起こるかもしれないと

妹の心を映したかの如く雨降り続きこの夏終りぬ

村 上 美 江 岩手

あまりにも早い旅立ち現実には夢か現か母九十四歳

救急車で運ばれたる母に駆け付けたり吾を解りて「ごめんね」と言ふ

検査終へ入院決まる救急の病棟寒く長袖羽織る

「容体が悪くなつたら連絡を」夜中に二度のナースの呼び出し

その場のみ消灯の中ぼんやりと小声ときどき六人待機す

喘ぐとき酸素マスクの苦しからむ右手で母は外さうとする

何か言ふ言葉が聞こえず顔を寄せ聞こえの良い耳近付け聴き取る
昨年に行つて良かつた母娘旅車で五分の地元の民宿

伊 澤 直 子 ☆ 東京

いつも咲く庭の百日紅に花はなくどうしたのかと蕾を探す
百日紅うす紅の花数輪の朝に気付けり八月も末
愛用のミシン四十年余働きて調子悪くし役を終えたり
作りたるブラウススカート手さげなど楽しい時間のたくさんありし
糸通し目の衰えて難しくちようど潮どきミシン買い替う
この頃はどのミシンも糸通し自動でできるこれは安心
売場には難度さまざま並べられまん中ほどの機種選びたり
今週はわが生日の巡り来る過ぎたる年月みなつかしき

乾 義 江 ☆ 茨城

充分なる息が吸えぬと医師に言えば我が息子宛に気胸と知らず
紹介の病院にて即差し込まれるドレーンの痛さに我を忘れる
空気を抜くメラサキュームと言う器具は厄介な代物我が身を縛る
間をおきて我が血 100cc を注入す功を奏したか快方に向かう
八王子にて養生せよと言ひ呉れる息子夫婦の住み家に退院す
入院三十日八王子への帰り道の退社時刻は渋滞の列
老化すればあちこち故障の増えてくる一人住まいの厳しさ身に沁む

永 光 徳 子 ☆ 東京

大雨に鉢植えの花取り込みぬミドリバタも一緒に連れて
雨上がり鉢植えの花庭に出すミドリバタは芝生を跳ねる
雨雨で早くも九月の半ばなり辻の地蔵に彼岸花咲く
土色の里芋思わず籠に入れ牛肉売り場でメニューは決まる
週一の娘と囲むランチには季節の味を手をとり伝授

駆けつ止まりつ

松 本 英 夫 東京

雪やなぎ白木蓮に辛夷さきひときは白しいつもの道は
「さくらんぼ」ナウシカのやうな歌声の幼子のゆく未来に招かれ
赤青の帽子の子らは手をつなぎ縦一列に春日の温し
高輪の大木戸の跡草生して木目あらたなゲートウェイ駅
木陰には涼しき風の入り来りみんなくまぜみかたみに鳴きをり
たわわなる銀杏見れば思ひ出す上野公園よぎる創展
葉の二つ駆けつ止まりつ遊ぶごとくくる回る駐車場の隅
球体より十六本の角出づる子らの遊具にロープの張らる

大 塚 照 美 兵庫

スコップにて転がる蟬を庭隅に埋むる土をひと山ふた山
あまたの蟻はらひて土に入るる蟬短きひと夏おもひ乍らに
食道癌克服ののち転職せし次男は成果あぐトマトハウスの

中腰の拭き掃除などもう出来ず床を這ひつけふは隅まで
行列の後尾の見えず鰻屋のその前通る土用の丑の日
久びさに包丁を研ぐ大根の千六本はあくまで細く
ごみ捨てて戻れる空にくつきりと浮かぶ満月七月名残りの
暑きまま暦は秋の寺庭に思ひの丈の聲なり蟬は

三 好 規 子 福岡

地震のため熊本勤務の子は三日間いへに帰れずホテルに三泊
背に湿布首にネッククーラー杖と傘に朝の散歩す日陰つたひて
公園に大音響の蟬の声の桜仰げど一匹も見えず
水や肥料たやさぬ去年のシクラメン蕾なほ持ち咲く立秋すぎて
小学四年にアルキメデスの渦巻きの図形を習ひしをふと思ひ出づ
浴衣着るスタッフと共に炭坑節の踊り楽しむ坐りたるまま
来日のアメリカ人らと炭坑節を輪になり踊りしを施設にて思ふ

須 藤 紀 子 埼玉

米作りやめたる兄が持ちくるる最後の米を有難く受く
白鷺が絡み合ひつつ戻りゆく伊波比神社の杜の塙へ
床にある犬の爪痕足裏に撫でて辿りて偲ぶ在りし日
在りし日の犬が芝生に遊ぶさま目に浮かびくる秋陽さす庭
ひよつこりと門の陰からあの犬が子犬の姿で出ては来ぬかと

氷河壁融けて濁流襲ひたり温室ガスとは縁なき村を
一瞬で人の命の消ゆるさま数多目にするこの世となりぬ
老いゆきて長寿を祝ひ死ぬること難き時代の気配迫り来

佐 藤 靖 子 東京

立秋や処暑やと分け目なき暑ささるすべりいまことさらの紅
気象警報すこしやさしく言ふリズム「こはいこはい」「こはいこはい」
妹と共にのはずが分けらるを覚えて納得はや故人ゆゑ
脳心臓眼球そのた再生の機能をなぜに得たるや井守
キャデラックフォードシボレーにはあらず思ひいだせずリムジンの名を
あたらしきドラマのキャスト「見たやうな」から分かるよろこび
ミーツーと言へばミースリーなど応へ若き母子のクッキーづくり
体幹の定まらぬ日日いまだ地震くればしつかり立ちて逃ぐべし

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

思ふことありて捨てずにきたる服いとも容易に手放してをり
紐に結ぶ衣類の束を運びゆく資源ごみとして座席に乗せて
ダンスドレス捨てるつもりのかつかの何と売れたり名を明かさずに
匿名で売り買ひできるシステムの有り難きかなドレスの売れて
喜んでくるるメッセーじ届きたり中古のドレス送りたるのち
お隣の鳶が伸びきて着地せりわが忍冬はフェンスを超えて

盆過ぎておせち料理のチラシあり映える写真に割引を言ひ

鈴木計子 東京

五十何回かしらとあした思ひたる記念日夕べは忘れて過ぎつ
朝の戸を開けたるヴェランダこの夏の初めての蟬死にてをりたり
鳴くこゑを聞かざるままにヴェランダに死にゐる蟬を庭に埋めぬ
八十の危ふかりにし兄のけふ八十七となる声聞きつ

百までも生きたしと言ひ八十を待たず逝きにし祖父はや越えつ
親戚に納豆屋のゐる話三浦二郎がその人と知る

二郎さんは夫の大叔父仙台の宮城野納豆創業者とぞ

石渡静夫 茨城

大雨になぎ倒されて田の稲は悲しげな貌そしてまた雨
突然の激しい雨に戸締りをすればガラスはみるみる曇る
ヤツデの葉天に開いて生き生きと降り続く雨音さえたてず
花水木赤い実をつけ雨の中もの言ひたげに葉を揺らしたり
稲刈りの済んだ田んぼに二番穂の緑たくまし雨の中でも
名優の逝きてあの声思ひ出す優しい語りの森本レオよ
降り続く雨の隙間を埋めるかに法師蟬鳴く力の限り
十五日ぶりの晴天言葉なく射し入る朝日鋭く眩し

西村邦子 兵庫

空海によつて始められた秘儀「後七日御修法」を映像に見る
全国の真言宗より選ばれたる須磨寺僧侶「後七日御修法」

広びろと静もる庭に法師蟬暑さ残して季節移ろふ

アメリカ藤ぶだうの様に咲くと言ふ西の窓ぎは若木を植ゑる
柔らかく伸びゆく蔓を誘引す夫が下で梯支へて

遺品なる義兄の補聴器譲りうけ慣れぬ手つきで夫は装着
義姉誘ひ芦屋川沿ひレストラン初盆過ぎたる夏の終はりに

植松千恵子☆ 静岡

クーラーなく断水に耐える熊本の苦難を思えば酷暑も我慢

富士登山子供置き去りは無謀過ぎ山頂目指す親の真意は

子供の頃三十度超えて猛暑だった夕立をゲリラ豪雨と呼ぶ昨今

お裾分け八分の一に切り分けて弟持ち来る巨大なスイカ

山火事に干ばつ熱波の国に分けてやりたし豪雨の水を

朝早く夜遅くまで鳴く蟬は短き命をがむしやらに生き

読み漁る東野圭吾の小説をフィクションなのに実話と錯覚

八月の長雨

永野雅子☆ 東京

梅雨明けて猛暑続けど汗かけぬ身体が徐々に悲鳴を上げる

エアコンが嫌いな我も暑さ負けで就寝中に除湿をかける

汗かけぬ日々に目眩が頻繁に起こり昼寝で体力回復

八月の猛暑覚悟し身構えど雨の日続き夜は涼しく
日照不足を千葉の農家に尋ねれば米は収穫し終えたと聞く
三年振りの富岡八幡宮例大祭いよいよ三日後雨の予報

川 上 美智子☆ 高知

待ち侘びし南瓜の雌花やつと咲き雄花摘み取り受粉手伝う
仲立ちの南瓜の雌雄は結ばれず雌花の子房はみるみる萎れる
撫子の花終わりたる草地には素知らぬ顔に高砂百合咲く

「眠るような最期でした」と知らせ有り友は全てを姪に託して
独り身の人生楽しく悔いなしと九十四年を生き切りし友
飼い猫を大事な家族と言いつつ友アンズは我にも懐いて居りき

川 俣 美治子☆ 栃木

雨止んで雲の切れ間に月見えて又隠れゆく夜の静けさ
電車待つ無人のホームによみがえる高校時代の若き賑わい
電車にて向かいに座る女子高生制服のボレロ遠き日のわれ
目の前でアゲハも遊びヤンマ飛ぶ景色も味わう外のひるげに
日光の元大使館のティータム貴婦人気分に入るひととき
雨の中歪むガラスに中禅寺湖元大使館の時は戻りぬ
エアコンを付けずに眠る今宵かな幾日ぶりに風の心地よさ

大 野 茜 神奈川

旅にでて水やり三日欠かしたる鉢の紫陽花我を恨むか
わつしよいと子供神輿が練り歩く囲む大人は三倍を超ゆ
案内の葉書を持ちてギャラリーに自作を語る知人は能弁
夜を通しがたがた揺れるシャッターに目の覚めスマホに進路見てゐる
手渡したるブラウス胸に当てて見せ施設の義妹笑みも生まれる
ばら一輪散りて重なる花びらに花瓶の下は桃色占める
久しぶりの妻の実家の菩提寺は紫陽花みつる寺に変はりぬ

小 林 貞 子 山形

狗尾草の穂はゆらゆらと薄緑かはゆい子猫を欲しくなる草
雨続き心うつうつたる日は月の満ち欠け数へ忘るる
自律神経衰ふ故か夏寒く汗ひたひたの去年をし思ふ
猛暑予報聞く傍らを吹き過ぎる風ははやばや透きて秋色
ぼつぼつと芽の揃ひたる大根の双葉の緑こよなく優し
取れたてのとんびまひたけ茄子と炊き食めばさくさく歯応へ確か
次世代に命繋ぐか三頭の蝶がひらひら苗床の上

本 間 志津子 山形

宿題の減らざるままに夏休み終る焦りを思ひ出す夏
台風は犬吠埼に上陸し東へ東へ進みゆくなり
日本海へ十五号台風去る後も木々立ち騒ぐ盃蘭盆会なり

熊本の震度七より七日経て死者三十八名に達するとき
いづくより飛び来し種子か姫女苑プランターに根付く夏の日中に
良純と孝太郎のコンビ富士山の絶景ポイント探す山の日
夏休みまだまだ暑さそのままに心細くも目減りしてゆく

益坂順子 福岡

十年の時を隔てて目指したる岩峰群の黒髪山へ
指ほどの鎖頼りてよぢ登り視界拡がる頂に立つ
乳待坊展望台に腰下ろし余韻たのしむ下山の途中
猪の掘りたる穴の数多く音量上ぐる山の中腹
高齢と酷暑の日びを危ぶみて遠ざかりたり登山の予定
曾孫の百日祝ひを終へたと写メール届く電話のあとに

梶尾栄子 兵庫

電柱を伝ひてつるは伸びてゆく青々として一本の木のごと
山奥に瞑想体験するツアー眠けを誘ふ頬撫ぜる風に
締めつけるものみな緩め水を飲むひでりの中を帰り来たりて
八月八日は算盤の日の語呂合はせ全国シェア七割誇る市
微妙なる段差のありて躓きぬホテルに膝を擦りむく夜更け
わが事のやうに嬉しき朝乃山の中盤の白星に過^よぎる優勝
「初恋」や「山のあなた」を口遊み自転車通学したる友あり

高橋燿子☆ 埼玉

息弾ませて耕せば白く丸いものがころりころりと出てくる
検索でキノコとわかり藪に投げる二〇個の余りの謎の物体
合点せぬ事あり検索繰り返し知りて驚く蛇の卵と
産みたての青大将の卵とは二十個という数でも一致
毒はなく畑の守り神になる知りて尚不安は去らず
腰かがめ梨の収穫する義兄は子や孫を見る眼差しおだやか
「食べるのは一番だわい」大きな梨をざるに山盛り
井戸水で冷えた梨をそれぞれが剥いて食べる大人も子供も

野崎礼子☆ 埼玉

ふるさとの夏恋しくて夢の中高速道路をひた走る我
安曇野の夏はからりと爽やかで時の流れをゆると感じる
目玉焼き黄身とろりと焼き上がり今朝は上出来明るい予感
オクラ切る星形ひとつふたつ出てまな板の上楽しき朝よ
ペランダで目玉焼きが焼けるねと黙して食べる夫を笑わす
ろうそくを吹き消す私の隣りには誕生日祝う夫の笑顔
夕暮れにひぐらし一斉鳴き出して八月の空生暖かき風
本物と見分けのつかぬ偽サイトどこかで誰かが隙を狙えり

九月号 作品一評

小林 芳枝

あんな長時間の手術などもうできないと主治医言ふさういへば頭髮真白 大山敏夫 難しい手術をしてくれた主治医との長い年月が背景になっているのだが正直な言葉から親密度の深さが窺える。

八十六歳夫ますます頑固なり雨が降りても水撒き止めず 林 美智子☆

水撒きを毎日の日課にして来られたのだろう。頑固というよりは謹厳実直な方を思い受けてしまうのだが如何だろうか。夫君の行動を少し呆れているように見ている作者も何時もの風景として受け入れているような感じもする。

だんご虫危険が逼れば背を丸め戦はずしてまあるく生きむ 村上美江

ダンゴ虫は甲殻類なので乾燥を防い敵から身を守る為に円くなるのだという。どんな時でも攻撃をしないで身を固くしているだけの平和主義的な姿勢に共感しているのだろう。

九月号 作品一評

藤田 夏見

全摘後小腸五十五センチ切り取りて造りし代用膀胱を今に 大山敏夫
完全な膀胱化だねああ凄い自力排尿後三十分残量ゼロ 大山敏夫

患部を全摘出後本人の小腸を切り取り今に至る。「代用膀胱は完全な膀胱化」という主治医の驚きの言葉。長年の摂生と努力を重ねてこられただろう作者。睡眠低血圧などに悩む歌にも触れており術後の不安を抱えながらと伺える。今も結社の代表として選者として活動を続けておられる。医師の言葉は作者にとって福音であつたに違いない。

一年にひと日だけ咲くサボテンに友を呼び寄せ酒酌みし父 斉藤トミ子☆

毎年の経験から年一度の開花の予想に外れはなく、その日を楽しみにやってくる父の友人。花を愛でながら酌み交わされた酒の場を娘心に懐かしまれている。

新しきぬか床作り張り切れど夫の畑の

ベビーカーに幼は体を振らせてひとみ真直ぐに母を見つむる 松本英夫

ベビーカーの子は前向きに坐り母は後ろから押すようになるので顔をみて会話することが難しい。私も子供の表情を見たいと思っていたことがある。目一杯体を反らせて母を見る懸命な子供の気持が集約されている下句に力がある。

好まない副菜のときも痩せぬやう口に押し込む施設の食事 三好規子

集団生活では時に自分の好みに合わない食事もある。きちんと計算された大事な食事だから何でも食べようという姿勢は元気で生きていたいという希望と食事を作るスタッフへの信頼であろう。前向きな作者に拍手。

柿の葉の動きの見えぬ今朝の庭かすかに揺るる甘草の花 齋鹿ミヤコ

庭の柿の葉に風の様子を見ることが多いのだろう。今朝は動かない柿の葉が下に見える甘草の葉の少しの動きに風を感じている。細かな描写がほんの少しの風の動きを上手く捉えている。

胡瓜の不作 林 美智子☆

夫の作った胡瓜を漬けようと新しいぬか床を作られた。作者の意気込みに反して夫の畑に思うように育たぬ胡瓜。

花と寿司を胸に抱きて姪の来る思いも 乾 義江☆

生まれ日というものは幾つになっても感慨深いものです。思いがけなくやって来た姪の胸に花束とお寿司。思いもよらない時間を何度も思い返してしまふ作者。

ひとり暮らしの長くなりゆく食卓にあじさみを切る梅雨の最中の 大塚照美

ひとりの暮らしは変わり映えなくてなるとなく物寂しい。梅雨最中に庭に咲く紫陽花を食卓に飾る華やかな雰囲気、作者の心持ちも明るくなったのだろう。

箱車に運ばれよちよち公園の四方に散りぬ緑の帽子 三好規子

箱車に乗せられた園児は公園で下ろされるとおのおの目指すところへ散ってゆく緑の帽子のその愛らしさを眺める作者も自然と微笑まれた。

時期と場所変へず幹事の順を決め年ど

眠るやうな義兄に夫は顔寄せて兄弟二人の時間を過ごす 西村邦子

兄と弟の最後の時、心を通わせながらただ時が過ぎてゆくような悲しく温かな様子が浮かんでくる。同じ母をもつ人だけに通い合うものが確かにある「兄弟二人の時間」が心に残る。

入れ歯外せと看護師が言ふ「ああいい奥まで全て自分の歯です」小林貞子
この歌の後に「半月ぶりの家の」という歌があるので入院されて手術前という時の歌の様だが、年齢からみて入れ歯を疑わなかった看護師とのやりとりが何だか楽しく感じられるのは作者がお元気だからかもしれない。28本全ての歯が健在というのは素晴らしい。

四年間夫に付き添ひ来し病院今日はわが身のエコー検査に 梶尾栄子

付添いとして通った病院に自分が患者になって検査を受ける為に来たという。御主人との四年間の様々な思い出が脳裏を過るのだろう。言葉では言い尽くせない様々な気持が籠められているようだ。

しやらむ会のいつまで 鈴木計子

場所と時間はいつもの通り。幹事は輪番というのはうまい方法ですね。ただこの会がいつまで続くのかしらって、限りある時間と思われている。

城址への入り口分らず二度までも通り過ぎたり住宅地の中 石渡静夫

この場所をスマートフォンで地図で探してみると、二度までも通り過ぎたという一見普通の住宅街の中にあります。どこだろう、確かこのあたりに間違いはないのだがと目を凝らしながら城址の入り口を探している作者です。

濡れるままもうお手上げと言ふごとく 下校の子の行く走りもせずに 梶尾栄子

下校時に降り始めた雨に濡れたまま歩いてる子を見かけられた。家まではまだ距離があるのだろうか、慌てて走り出すこともなさそうな様子。「濡れるままお手上げ」の表現そのままの雨の子。潑刺とした元氣盛りの子の姿が見えます。

十一月集

岩村 知康 長崎

緊急の地震速報ラジオより流れ途端にわが家も揺る

この揺れは十年前と同程度なるか真夏の熊本地震

わが家ゆ天草島の遠く見え手前の灘は今日も和ぎをり

天災は忘れぬうちに繰り返す地震に豪雨また台風も

八月の日照り水撒く過酷さに放棄やむなし里いも作り

親芋に新たに赤芽大吉を植ゑて伸びゐし梅雨明けまでは

里いもの不作は二年続きしにあはれ茎葉をまた枯らしたり

台風の雨待ちゐしに事もなく過ぎぬ今年の二百十日は

梅雨明けてふた月ほどを降らざりし雨つひに降る九月三日に

東 ミチ 青森

盆の入り広き墓園の賑はひに知る人もなく心のままに経を唱へる

庭ぬちのルドベキアの花みだれ咲く干し花用には丁度刈り時

熟れてゐるトマトの上にカナブンが息絶えてゐて愛ほしくなる

まだ少し羽を動かす赤トンボを水撒く花の葉に乗せてやる

去年とは違ふ秋の気配なり鳴く虫の音に潤ひのあり

草むらとなりたる友の家の跡地にはエノコ草も待宵草も

加藤 富子 ☆ 栃木

血糖値一年毎に上昇セルフケア後に受診せむ

町内の八幡宮までウォーキング身体の異常なくほつとする

月一回美容室にて出逢いては旧き仲間の消息を知る

案じいる友の消息知らされる看護師の資格持つシングルマザー

ペランダに赤き花咲き媼の笑顔施設生活に彩り添えて

二ヶ月ぶりに三人集いて買い物とランチとおしゃべり五時間余り

山崎 猛 ☆ 埼玉

弟の墓に参りし去年より無沙汰を胸に未だ出向けず

父母を連れて伊勢神宮へ旅をせし遠き日のこと今よみがえる

伊勢京都をめぐりて奈良に着きし日の疲れ鹿の姿を見て休めたり

山並みの稜線淡く霞みいて山の向こうに母のふるさと

今朝咲きたる極楽鳥花の蕾ふたつ朝の冷気に清しさ伝わる

友より贈られし桜幹伸ばし葉を増やしている庭の片隅

目覚めても昨夜の悪夢残りいてコーヒー碗を持つ手震える

藤田 英輔 ☆ 高知

夏の朝のハウスの屋根打つ雨音に踊り子となる甘とうの列

飼い犬はオムツ姿で真っ直ぐに吾を見つめくる散歩に出ると
新しき長靴は幼が選びたる二センチ大きな同じ型・色
軽トラの窓に蛙は踏ん張って二キロ離れた地に飛び降りる
小さなキリギリスひとつ庭に来て夕暮れてのち機を織るなり
ゴツゴツの岩の様だった夏の雲千切れ流れて筋となる秋

児 玉 孝 子 ☆ 愛知

花壇の土耕し花苗植えおれば嫁は案じて無理すると言う
庭の草の僅かを独り抜きおれば短き命の蟬の亡骸
猛暑日に植えしベチュニア案じしが暑さに強く根付きくれたり
盂蘭盆に嫁とお墓に詣れば造り花多く墓所華やぎぬ
入社の孫建築士の免許とらねばと盆に帰らず試験に挑む
朝顔の緑のカーテン窓一面に花を咲かせて光を遮る
朝顔に夕より開く花のありプランターに水かけつつ眺む

安 川 敏 子 ☆ 埼玉

夏祭りの屋台提灯雨の中に灯りがゆらぎ匂い懐かし
高齢になりて識ること数多あり学び伝える楽しみもあり
ぶどう狩り「クイーンニーナ」は色美しく深い味一粒食べたらしまらない味
コシヒカリが泥水かぶる干涸びる福井と九州災害つづく
毎朝のニュースに自然の脅威知る悲しい現実次々起こる

秋彼岸いつもの道を和やかに花屋に寄りて墓参に向かう
災害に重ねて襲われ人々は停電断水只耐えるのみ

佐 藤 幸 子 山形

雄花しか咲かぬと南瓜の苗を抜く友よ雌花は後から出るのに
工房のモルタル床に水を撒きブラシ掛け終へ盆休みに入る
雨露を払ひつつ摘む大輪のダリア一抱へ仏壇に供ふ
四人姉妹の一人欠けたる女子会に巻き戻しある七十余年
拭へども拭へども汗のべたつきて逃げ場なき午後の残暑に喘ぐ
極まれる晩夏の蟬の大合唱あたかも地球の沸き立つごとし
一瞬に朝日を奪ひ強き雨が屋根裏叩く音たてながら
八月尽やうやく上がりたる長雨なり庭に一輪鹿の子百合咲く

井 上 鈴 子 山形

それぞれの音を響かせ調和して吹奏楽の児らはひとつに
網戸よりひんやりの風・虫の音が眠り誘ふ真夏の夜は
ひとり居となりたる姉は戸を閉めて熊対策と防犯対策
阿武隈に夫と求めし大理石の白き花瓶にピンクのばら挿す
八幡神社の祭り近づき練習の笛の音聞こえて真夏が闌ける
せめぎ合ふ獅子と警固の息遣ひ草鞋の踏み締む土舞ひ上がる
叢雲にうつすら月が見え隠れ虫の音弱し友の初七日

九月号 九月集評

鈴木 やよい

梅雨入りの前に甘藷の苗を植ゑわが農作はひと休みなり 岩村知康

サツマイモの苗を梅雨入り前に植え終えたようだ。やるべき事をやってほっとしている気持ちが、結句に表れている。年々に除草をなすも露草は南瓜の葉間にまた生ゆるなり 同

露草という可憐な青い花を思い浮かべる。でも畑では、繁殖力が強い厄介者のようだ。除草してもまた生えてくる。農作業の苦労がうかがえる。

収穫の玉葱みなに分けてやる今年で最後の吾の作品 児玉孝子☆

玉葱を作り続けてきたようだが、今年で最後だと言う。少し寂しいかも知れない。でも「みなに分けてやる」という前向きな姿勢がすがすがしい。

休刊日の今日は昼まで暇ありて墨すり古筆の臨書をなせり 松居光子
いつもはじっくり新聞を読むのだから

う。でも今日は休刊日。その日は墨をすって臨書をするという。なんと充実した日々を過ごしていることか。

レシーブのすごさに会場どよめきぬ弾丸サーブよくぞとれたり 小嶋知葉☆
弾丸サーブの威力とスピード、それを受けた時の強烈な音、そして会場のどよめき。スピードと音を強く感じさせる。小さき虫素手に叩けば手のひらに鋭き痛み蜂の針刺さる 津田美知子

結句まで行つて「えっ」と驚く。気付かずに蜂を叩いてしまったか。想像するだけで痛い。

献体を済ませた友の喪儀あり二年の月日静かに流れて 高藤朱美☆
医学に役立つことを願つて献体されたのだろう。友人の葬儀が二年後に行われた。それまでの月日を表現する「静かに流れて」が胸を打つ。

退院の夫乗せ帰る庭に咲くデルフィニウムは小雨に青し 井上鈴子
退院のご主人を乗せて帰宅した作者。庭に咲く青いデルフィニウムを見た途

端、安堵の気持ちが広がったことだろう。それまで張り詰めていたものがほぐれていくのを感じながら。

片付けの度に書棚に残りゐる少し黄ばんだ『王朝の恋歌』 同

捨てられずに、気付けばいつまでも手元にある本。作者にとつてのそんな本が『王朝の恋歌』のようだ。本の著者は女流歌人の生方たつる。影響を受けた本かも知れない。「少し黄ばんだ」に歳月を感じる。

春植ゑて芽吹かぬ皐月の枝先にシヲカ
ラトンボ羽根休めをり 羽田孝輝
春に植ゑてまだ芽吹かないという皐月。植ゑた時に根を傷めたか。枝先に留まっているシヲカラトンボに目をやりながらも、皐月が気掛りだ。

帰宅してからの行動巻き戻し探した鍵は戸に挿したまま 金子八重子☆
物を無くした時によくあること。行動を巻き戻すという感覚はピッタリだ。多くの人が経験する状況をユーモアを込めて表現している。

九月号 十首選

冬雷集

須藤 紀子

九月集

中村 哲也

生日の十九を「重苦」と云はれしが「徳」に解せと母論しけり 櫻井 一江
これといふこともせぬ間に半夏生なにかせねばと冷酒をちびり 山口 崇
梅雨空に僅かにのぞく青空を希望と名付け見上げてゐたり 天野 克彦
無花果の実の大ききの日ごと増す大腸ポリープ切除の癒えて 嶋田 正之
ただいまと君のかへるを待ちわびて過ぎし年月また木槿咲く 橘 美千代
カタカナにされれば軽しジェノサイドはるかに遠き物語のごと ブレイクあずさ☆
草に紛れ真つ直ぐに立つねち花は螺旋の先をさらに目指すごと 鈴木やよい
走りとふサーモン網引く海人の野太き声の浜にこだます 田端五百子
夏椿ほそくなる花ひろひつつ開ききらないままなるを惜しむ 戸部田とくえ
細きほそき手が電気を渡す様われの心臓の動きと言へり 姉川素枝子

年々に除草をなすも露草は南瓜の葉間にまた生ゆるなり 岩村 知康
珍しく二つの台風重なるに気象の報道案じて見入る 児玉 孝子☆
休刊日の今日は昼まで暇ありて墨すり古筆の臨書をなせり 松居 光子
珍しくクロスワードがスイスイと解ける朝あり朝顔も咲く 小嶋 知葉☆
蜘蛛の足器用に糸を操りて巣の外周より中心へと編む 津田美知子
鮮やかにルドベキア咲く三種類連日続く地震のなかで 高藤 朱美☆
穀雨とも麦雨とも言ふこの雨を栗の花雨とわれは呼びたし 井上 鈴子
庭先のイタドリ背丈ほど伸びぬ熱き日差しに萎えることなく 羽田 孝輝
春植ゑて芽吹かぬ皐月の枝先にシヲカラトンボ羽根休めをり 羽田 孝輝
体操服忘れた夢の中の吾は七十五歳の中学生 金子八重子☆

お知らせ

■十一月の歌会情報

川越歌会は十一月二十八日(土)

J R及び東武東上線「川越」駅西口

より五〇〇メートル

ウエスタ「川越」二階第5会議室

午後1時4時半まで

(「冬雷」十一月号をご持参下さい)

司会 倉浪 ゆみ

*参加希望者は左の係まで連絡。

☎安川敏子 (090-4608-7265)

☎野崎礼子 (090-9971-8149)

冬雷

下手でも良い
自分の歌を作れ

印刷データ内製化による
自在な編集・充実の誌面

編集発行人 大山敏夫



添削無料
連絡先・事務局 03-3604-3655 小林芳枝
〒125-0063 東京都葛飾区白鳥 4-15-9-409
URL <http://www.tourai.jp> 最新号を掲載中

九月号 作品二評

井上 菅子

水割りの水を回す音軽く胃カメラ事なき今宵の夫 佐藤幸子

胃カメラの結果異常のなかった安堵感、心の軽さが、「水を回す音軽く」に表している。水割りを飲む日常の続く喜びが、夫にも妻にもあると暗に詠む。

擬宝珠の新種を見つつ買ひあたる気力溢れし彼の頃こひし 東 ミチ

擬宝珠も品種の多い植物で、葉の色彩大小種々あるが、収集家には新種は見逃せない。筆者も擬宝珠を次々集めた時があり、下の句に自分を重ねて共感した歌。今年またキンカン生るの楽しみにうれしくなって毎朝見てる 早乙女イチ☆

実の生る樹には楽しみがある。キンカンはすでに小さな実を付けているのだから。「毎朝見てる」に期待感がある。蒸す日にもほどよく冷やした心太黒糖みつで喉越しさはやか 山本述子

蒸し暑い日の冷やした心太、それも黒

糖蜜をかけて甘くしたのは、さぞおいしだろう。冷やして黒蜜かけて、と丁寧

に心太を表し、おいしさが強く伝わる。縁起物の千両去年は葉ばかりで今年は

なんとびっしり蕾が 安川敏子☆

正月飾りには欠かせない千両。葉のみ繁った去年は、今年のために英気を養っていたか。びっしりの蕾に運と福があり、葉ばかりと蕾、無と有との対比がある。

留学生ツンツルテンの浴衣きて線香花火見詰めおりたり 立石節子☆

留学生の背の高さを、ツンツルテンの浴衣」と、的を射た視点。見詰めているのが、小さな線香花火でおもしろい。

食べ残しのじやが芋集めゴミとする精出して植えたあの日はどこへ

松崎みき子

食べ残しは人間ではなく猪であった。難儀して植え、成長を見守ってきたじやが芋が、一晩にして猪に食われた。その徒労と空しさを痛切に訴える下の句。

デジタルの世に今もなお求めらるる指紋認証に安堵するわれ 山崎 猛☆

デジタルの世には血の温かさが無い。指紋認証には人と人との触れ合いがあり、安堵の気持がよくわかる。

兄ちゃんが毎日開け閉めをするランドセル僕は赤が欲しいと四歳児の願ひ 野口秀子

字余りが多く破調ではあるが、幼い兄弟の様子が生き生きと表現されている。兄のランドセルが羨しい弟を活写。

畑仕事終えて帰宅の夕空に月と金星はうびのごとく 塚本節子☆

月と金星を同時に見られたことが、ほろびのようであった、というところに、頑張った畑仕事を言い得ている。

「三内丸山遺跡」近くにあると知りたれど集合時間の迫りて行けず 井出裕子

団体旅行の窮屈さを詠む。筆者も遺跡ではないが同じ経験があり残念さに共感。歩き来てほっと一息ついた時暑さ忘れる鶯の声 首藤文江☆

鶯の声をタイミングよく捉え、休憩の行動まで見えるような歌。

九月号 作品二評

江波戸 愛子

水割りの水を回す音軽く胃カメラ事なき今宵の夫 佐藤幸子

胃の不調を感じて検査を受けた結果に安堵するご主人を水割りの水の音で詠みご主人を見守る作者の優しさがよく判る。

病院の外のベンチで車待つ緑の風に安らぎながら 卯嶋貴子☆

前の歌に意識の無いご主人が救急車に運ばれる歌がある。入院になり手続きを終えてご主人を医師に託した安堵感が下の句に伝わる。

暑き日のグランドゴルフに汗するもシャワーの後は爽やかになる 山本述子

暑い日にもグランドゴルフに熱中する作者の若さが素晴らしい。終えた後に浴びるシャワーは身も心も爽やかになるのだろう。グランドゴルフだけでなくその仲間との交流も楽しみの一つなのではないだろうか。熱中症にかからない対策

もされているようだ。

台風の影響ありて露天風呂にて雨に打たれる愉快な体験 加藤富子☆

旅行先でのあいにくの雨だが露天風呂の中で雨に打たれたことを愉快な体験と詠んで楽しまれた。思い出に残る楽しい旅行であったことがよくわかる。

じやが芋の畑猪に荒らされて囲ひの穴を夫と探す 松崎みき子

ご主人と植えて食べごろになったジャガイモを猪に食べられてしまった、何処から侵入したのかご主人と探しているが侵入先がわかって悔しさはのこる。

畑仕事終えて帰宅の夕空に月と金星はうびのごとく 塚本節子☆

太陽に照らされながらの畑仕事を終えて帰るのは夕方であまりながら見上げる空には月と金星、その星をほうびのごとくと詠む。少し疲れが取れただろうか

陽の弱き朝と夕のみ畠仕事できるを感じ謝して寝床にをりぬ 水澤タカ子

畑仕事を長い間務めてきた作者、まだ朝と夕方には畑仕事のできる喜びを詠む。

我が過ごしし街なかに知る人はなく五十年前の道ただ歩みゆく 野口秀子

昔に暮らしていた街を歩いていても、知る人と会うことはない、実家へ帰る道も新築の家が建ち街並みが変わってしまった、うなづきながらこの歌を読ませていただきました。

干し柿と熟柿の冷凍生まれ日に熟持つわが身の滋養となれよ 藤田夏見☆

庭の柿だろうか、こういう時のために冷凍保存されたのだろう、わが家の冷凍室には余裕がないが真似をしようと思う。

我を知る弟の呉れたる花鉢は手間の掛からぬガウラとランタナ 井出裕子

姉弟はお互いを知り尽くしていることがよくわかる歌、ガウラとランタナは元

氣に育っているのだろうか。歩き来てほっと一息ついた時暑さ忘れる鶯の声 首藤文江☆

他の歌に札幌を詠んだ歌があるので、もしかしたら札幌へ行かれた時に詠んだ歌だろうか。意外な所で聴いた鶯の声に癒されたことがよくわかる。

作品二

花樹折々

大山 敏 夫 埼玉

駅前の大櫟並木芽吹き初む伐られまた伐られ挫けぬものか
花水木赤と白とが咲き揃ひ一年でもつとも輝くと思ふ
退職後経し十五年梅ひらき桜散り躑躅咲けば五月か
花の蜜風にかをりて心地よく窓にし寄れば針槐はりあんじゆ咲く
花の枝たをりて持てばニセモノのアカシアの名をもちて譬し
みちのべの小枝に見たるヤマユの淡きみどりは今朝の収穫
頭のうへ枝葉広げて大きくわりん垂るる青実の重たげに照る
ゆるき坂上りくる車つぎつぎにヘッドライトが吾を照射す
「使用有効期限三十一年まで」命の保証することく言ふ

藤 田 夏 見 ☆ 広島

千両の数多なる実は七月の梅雨明けよりの早に消ゆる
猛暑なるふた月あまりに雨二日お天道様を仰ぎ見る日々
梔子にオオスカシバの産卵す足長蜂の狩り場の一つ
産卵のオオスカシバに猫パンチ啞えてゆきぬ尾を立てながら

待ちまちて潤う畑に石灰を振り耕せば秋茜の群れ

白菜と大根植えんと耕せる向こうに人参もう本葉なり
捌きたる鰯の頭と骨までも土に還りぬコンポストの中
コンポストの土使いたる種芋の芽の出揃いぬ秋の馬鈴薯

松 居 光 子 三重

リビングの窓より見ゆる打ち上げの花火は円く大きく開く
ドドーンと凄まじい音の響き来て窓がガタガタ振動すなり
次々と耳を劈く破裂音に思ひは戦地の銃声に及ぶ
新しいポーズ加はり心弾む月の始めのテレビ体操
少しづつ日暮れの早くなりてきて暑き中にも秋の気配す
真夜覚めて重ぬる肌掛け心地よしやうやく近づく秋の訪れ

大 塚 雅 子 ☆ 東京

飯碗の割れて小鉢を代用し食事をする事気付けば数月
迷いあぐね林檎の描かるる飯碗を置いて今日は最初の夕食
日本橋限定あんぱん勧められ間食控える決意の揺らぐ
三階席のわれも人気役者の登場にオペラグラスを構えて見入る
青空と強い日差しの戻り来て先月以来の日傘を開く

山 本 述 子 神奈川

震災に風水害に山火事と地球の怒り果てしなくつづく

日焼けして少し背丈も伸びたやう二学期初日の生徒照れ気味
雨続き籠りたる部屋気になりて一挙に掃除す気分さつぱり
団地の移動販売週一度立寄りみれば意外に便利
盆参りにはか雨にて早々に引き揚げたれど心残りす
酷暑にもグランドゴルフに汗流し日焼け気にせず身は堅固なり
自家製の唐辛子にてぴり辛の三条漬けを仕込みたる友は

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

勤め先より呼び出されたる息子二人と一日中夫のベッドの横に座りぬ
入院し二ヶ月経ちたる夫は八王子の介護施設に転院決まる
膝を痛めて買物に行けず宅配のコープデリで日用品を買う

津 田 美知子 岩手

亡き母の「何事も無く過ごせる日々を幸せと言ふの」と言ひしを想ふ
平凡な一日の始まり仏前に座して静かに両手を合はす
他人様の心読めずに身勝手な吾が振る舞ひに反省しきり
我が里の行灯七夕引く人等の昔の賑はひ想ひ比べをり
裏庭のガサゴソする音覗き見れば熊にはあらず草食む鹿達
二年過ぎて山火事跡の赤褐色消失面積見つつ驚く
日本の上空壊れたるやうな大雨災害各地に起こる
暑さ残る八月末の夕餉時に鳴きゐるヒグラシとコホロギの声

松 崎 みき子 岩手

盆過ぎに港から出るサンマ船一旦は釧路港を目指すと言ふ
釧路から漁場は更に遠い沖食卓のサンマ有り難きかな
増水の川の流れにアヲサギは川岸辺りでじつとしてゐる
背丈ほどキバナコスモス伸びたる畑一角の花揺れて楽しも
庭草も畑の草も鎌一本草引き道具の手入れ欠かさず
新鮮な野菜料理を食卓へ近頃夫の顔色良くて

古民家の庭から出て来て道路走るキノシシ親子に目が点となる

小 嶋 知 葉 ☆ 茨城

贅沢を肌で感じる土曜日の「題名のない音楽会」に
九月にはオーケストラと素人の夢の共演にどよめくホール
義姉より孫出演の電話ありN響ホットコンサートに
姉の孫トランペットの奏者なりテレビ出演時々ありて
甥やかさ求められたる合唱曲「風」「月」「花」と「夕焼け」歌う
隔月に集いてランチとトークする八十六歳の夫の友と
運ばれたるビーフシチューを四人とも見事に発揮す健啖家ぶり

立 石 節 子 ☆ 東京

カンボジアフィンランドをかじり知る高二の孫は世界を夢見る
酷暑過ぎ長雨の秋カンナ咲く広島の花を見しという花

心地よき秋の風情は何処へか野菜高騰大雨警報

眼鏡替え辞書の文字まで見えたるも神の作りし目には及ばず
夏休み終わりまぢかの夏祭り子供も大人も共に燥ぎて
オーボエとクラリネットとファゴットが息を合わせて合奏したり
孫たちの発表会が迫りきてピアノの音のすさまじきこと

水 澤 タカ子 山形

酷暑日を子にうながされ蔵王の湯の外風呂に入り秋萩を見る
新左工門の湯宿を出れば雷雨ありしぶく中を車にのがる
いが餅は名物なれど雷雨にて傘もささずに車へ急ぎぬ
硫黄の香りのこる肌はさつぱりと山形市街を下に見てくだる
わが家のあたりに慈雨はなぜ降らぬ畠の作物雨ほしがるに
八月六日広島第一高女の赤松蕙子の俳句を聴きつつ胸しめつけらるる
ピカドンの一瞬に遇ひし十四歳の赤松蕙子を語る願行寺の坊守
天童市文化会館・地区公民館に展示して平和活動にますます励み进行

野 口 秀 子 山形

兄逝きて夏来にけらし故郷の地蔵尊まゐる里の人らと
故郷の製紙工場の歴史視んと集まる方は高齢者多し
講師の人は高齢となるもじつくりと話しくれたり二時間に渡り
夕暮れに田畑を巡り故郷を思ひて眺む父も母も亡く

百日草の紅き花を摘み食卓に差せば生き生きとしてあたり明るむ
黄の色の小さき蝶々ひらひらと飛びゐる朝の庭に來たりて
傘をさし庭の奥にて梅擬きの一枝切りて紅き実眺む

奥 山 清 子 山形

朝明けの光うごける西山に白き満月いま落ちむとす
たがはずに節黒仙翁咲き初むる「ハイジの色」と思ふ朱の色
大鉢に移し植ゑたり丸葉藍エジプト原産藍染の礎
鹿沼土油粕の効き目らし西洋石楠花緑葉芽吹く
花婿を迎へる如く懇ろにガラスも磨き息子明日来る
イギリスに学びて十年の孫來たる夫の初盆笑顔満ちたり
弾かずして久しきピアノの來て音よく奏づ「千の風に」を
みどり子に逝きし初孫の三十三忌夫と共に法事を為せり

井 出 裕 子 静岡

愛用のカップ落として持ち手欠く乳癌検診受くる朝に
不安持ち病院に行くも異常なし朝を思ひて胸撫で下ろす
今夜だけ欠けたるカップで茶を飲まむ我の身代はりになりぬと思ひて
我が庭に三毛の仔猫が迷ひ來ぬ以前飼ひゐしチビに似てをり
我が目見て小さく鳴きゐる迷ひ猫にチビの好みしチーズ与へぬ
朝迎へ「どつ」と声出し口つぐみ「こいしよ」はのみ込み布団より出づ

高 藤 朱 美 ☆ 茨城

葉月にて涼しき朝に茶を沸かすしっとり暖か体に染み入る
思うより狭く感じた甲子園三塁側で応援したりき
ちぎり絵と甲子園ボール落ちて散る震度五弱の夜中の揺れに
ルドベキアの勢い続き秋明菊は秋の気配を知らせくれたり
「阿波おどり」舞う映像を見つつ居て懐かしさ増す徳島空港
幾度となく自然災害迫り来る気がまあありても防ぐすべなし
温暖化に「地産地消」の薦めあり買い物しつつ気になる産地
人生の悲しみ苦しみ花として腰の痛みは御免蒙る

塚 本 節 子 ☆ 茨城

炎天の庭に咲きたるルドベキア・タカオの小花夕闇てらす
夕立の名残りの舗道まだぬれて蟬しぐれ追う夏のひかりに
雷の近くなるたび蚊帳中へ避難せし彼の日々のなつかし
塩麴にしょうゆ麴をかきまぜる朝のひとつかなかなの鳴く
QRコードかざして給油するスタンドの空いわし雲ゆく
田の果てに片足立ちの虹かかるジェット機消ゆる虹の彼方へ
赤信号停まりたる先の電線に燕の親子信号を眺む

羽 田 孝 輝 山形

裏庭のプールに浸かる熊を見て嬉しく思ふ人らを羨む

屋根を打つ雨に負けじとヒグラシの声降り注ぐ屋下がりがな
庭先に狸の親子の現はるる猫身を乗り出し窓に固まる
帰省せる同級生を囲む会先づ始むるはライン講習会
地震あり酷暑の中で避難せる人々ありて新聞に見入る
雨上がり棚の皐月はどれもみな施肥も効いたり緑濃き朝
莢莢に寄り来る番ひの鴨に猫固まりて窓に張り付く

金 子 八重子 ☆ 千葉

エアコンに冷えた身体を温める猛暑の日々の生姜紅茶は
一キロのダイエット達成すこの夏のアイスを食べぬ決意守りて
気に入りの水筒手元に置くだけで水分補給はこの夏容易し
不参加の同窓会の写メールの顔顔顔にタイムスリップ
赤ちゃんはグーしか出せぬに容赦無くバーを出してる屋台のおばちゃん
海苔弁のおか醤油がごはんに染みて大きな一口箸に持ち上ぐ

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

夏になり時期逃してはと意気込みて決まって作る茗荷のぼら寿司
風鈴のかすかな音に耳澄まし洗う手を止めじつと聞き入る
待っていたように信号が青になり流れる汗は首筋伝う
好物のゴーヤの高値続けども食する日まで夏は終わらぬ
暗闇に「リー」と聞こえる虫の声夏の終わりを告げるように

九月号 作品三評

山本
三男

カタカナもひらがなさえも根は漢字中国産を無料で無断で 新井光雄☆
カタカナやひらがなは日本語を表記する上で欠かせませんが、漢字を利用して作ったものですね。「無料で無断で」という視点がユニークです。

初生りの葡萄はシャインマスカット宝の二房無事に実れよ 越澤太朗☆
シャインマスカットは「緑の宝石」などもと呼ばれ最近人気の葡萄の品種のようです。無事に実ってもらいたいという切実な思いがそのままストレートに表現されています。

七月になれば恒例の梅ジャムを今年も作り友等に配る 長澤千恵子
梅の実の熟す時期は決まっています、毎年同じような時期にジャムを作っているでしょう。歳月の移ろいにあわせての丁寧な暮らしぶりと、ご友人との温かい交流が素直に感じられる作品です。

九月号 作品三評

橘
美千代

二年後に世界哲学会議あり生き抜き聴きたしシンポジウムを 新井光雄☆
世界中の哲学の徒が集う会議でのシンポジウム。最先端の知識が集結し議論が戦わされるのだろうか。作者は参加を強く希望されている。弛まず学びを求め続ける意欲が素晴らしい。

歳月の年々早く過ぎ去りぬ「ジャネの法則」実感するなり 後藤恭介☆
一年が経つのがどんどん速くなる。今年もあと四か月。ジャネの法則の通りだ。六歳にとって一年は人生の六分の一、六十歳には六十分の一であるという。

大玉のトマト地表から十センチ菌形残して野うさぎ去りぬ 越澤太朗☆
畑に大きく見事に実ったトマトが地表から十センチ程に垂れ下がっていた。野うさぎが来て食いついた。そこに丁度作者が見に来た。野うさぎは驚いて逃げ去った。トマトに無念の菌形をしっかりと

最上川の流れの見ゆる丘ありて遠く残雪の朝日岳も見ゆ 児珠純子
ガーデン花野は山形県にある個人所有の花畑のようです。その花から最上川や朝日岳が見えるのです。朝日岳はまだ残雪があるようですが、雪溶け水は最上川へ流れ込むのでしょうか。雄大な景色が目に見えます。

若き日にわれ聞きもせず父も又戦争体験話すことなく 河原木光子☆
大変重い歌です。お父様が戦争体験を語らなかつたことは、戦争の傷跡の深さがあつたかも知れません。また、若い頃にその事を聞くことのなかつた作者のわだかまりは、歳月を経ても心の底に残っているのでしょうか。

腰屈め苗植ゑし父を思ひをり田植ゑ機に乗りて煙草吸ひつつ 塩野 伸
かつては田植ゑは苗を手で植える光景をよく見られましたが、高齢になるとこの作業は大変な労力だったことが分かります。今は機械化して煙草を吸いながらも田植ゑができる時代となり、お父様

残して。まるで「ピーターラビット」のストーリーの一齣のようだ。

半夏生の花咲きたれば田圃みな苗の青さに一面染まる 今野澄子

七十二節の半夏生は農作業の大切な目安で、田植ゑは夏至の後、半夏生に入る前に終わらせるものとか。一方、この時期に花が咲き、花の近くの葉が白くなるのが草の半夏生。時期を逃すことなく田植ゑの済んだ田圃は苗が瑞々しい。

楊柳揺れ湖上吹く風爽やかに岸の真菰に波寄せ返す 長谷川 剛

よどみなく流れるような調べの心地良い叙景歌である。湖を吹き抜ける爽やかな風に読者もいつしか包まれて。写生のゆき届いた下の句に結句が永遠を刻む。

アスチルベはみきちやんの花タンジーはとしちやんの花と言ひて育む

花にそれぞれ呉れた人の名前をつけて呼んでいる。ユニークで素敵だなと思う。ほのぼのとした調べがかつての童謡のようだ。ふと「歩き始めたみいちゃんが：」

のご苦労をしみじみと思い出されていらつしやるのでしょうか。

離婚して五十で店を開いたと苦労を笑顔で語るひろちゃん 倉田ひろみ☆
ひろちゃんという人の人柄を感じる作品です。このひろちゃんとは異なる道を歩んできた作者ですが、ひろちゃんの生き方に惹かれる部分もあるのでないかと思いました。

あこがれのカナダの旅に誘はれて広がる景色に心の弾む 和田妙子
雄大な自然あふれるカナダへの旅のあこがれが現実になろうとしていることへの高揚感が感じられる作品です。「広がる景色」という語句はまだ見ぬカナダの景色を浮かべているのでしょうか。

孫と採りたる絹さや五つ味噌汁に入れば美味し五月の夕餉 高橋睦夫☆
絹さやのシャキシャキした食感とほのかな甘みによる美味しさが伝わってきます。お孫さんと共に採った絹さやであれば格別でしょう。旬の食材が活かされた季節感あふれる作品です。

の歌が浮かんできた。

帰りたくない小さな手に持ったりんご飴涙のように溶け出す 鈴木裕子☆
子供達にとつて祭りはわくわくと楽しくて堪らないドリムワールドである。りんご飴を握りしめ駄々をこねる幼児。溶ろけるりんご飴の甘さが幼児の愛らしさ、幼年期の思い出に通じるような。

腰屈め苗植ゑし父を思ひをり田植ゑ機に乗りて煙草吸ひつつ 塩野 伸

機械化の進む以前の農作業は今より過酷であった。特に田植ゑは長時間屈んで一本一本手で植える重労働。今、作者は田植ゑ機に乗りそんな父の姿を思う。対比が効いている。二句目「父を」と助詞「を」を入れていて正統派である。

時差からは逃れられぬと知りつつも眠れぬ夜の長さと思ふ 和田妙子

カナダまで地球を半周する移動の時差はきつい。対策に現地の夜まで起き続けていたりして。慣れない異国の夜に眠れない作者か。筆者もカナダのモントリオール（注）の春の夜の薄ら明るさに驚いた。

作品二

「ああ無情」

新井 光 雄 ☆ 東京

朝の四時目覚め眠れず仕方なく仏語テキスト一ページ読む
仏語会ドーデーなんとか読了し次はユーゴーあの大作を

「ああ無情」「レ・ミゼラブル」の超縮版それでも仏語だ難航必至
一ページに知らぬ仏語が続出す何年やっても語彙は泥沼

「ああ無情」小三の時担任の師から賜り今も手元に

「レ・ミゼラブル」大学の友が完訳す全五巻なり筑摩文庫で

ジャン・バルジャン主人公の名どっしりと少年私の記憶の底に

思い出のざっくり詰まる「ああ無情」間もなくゴミとなる他になし

後藤 恭 介 ☆ 茨城

常総の道の駅は大人気ケンピとメロンパンに行列をして

夏の朝椋鳥の大群空を舞う三島駅前で二人で見つめる

仙台より苦小牧までの船の旅静かな海とブッフエの夕食

北海道のガイドさん話上手にてトド松エゾ松の枝の違い知る

霧雨にけむる山頂函館山まだ見ぬ街は乳白の色

朝市と五稜郭タワーとバイエリア最後の函館は忙しき旅

高齢者の観光旅行は体力勝負日頃の体操大事にせんと

越澤 太 朗 ☆ 茨城

種まき後一週間で発芽する常総秋そば畑一面に

毎日天気予報とにらめっこ猛暑凌いで草刈る畑

草むらに育ちたる長ネギ白身多々調理する妻はこれもいいねと

農道の萩の一枝手折りに帰る秋の気配が一輪挿しに

シニアクラブ会報担当十年にて短歌掲載人気を博す

法師蟬鳴き初める八月二十日過ぎ秋の気配す林の中に

北陸の集中豪雨に胸痛む現役時代の営業の道

今野 澄 子 山形

秋野菜並ぶ夕餉の食卓に大根・かぼちやことと煮える

逝き急ぎし友へ今日もまた送る既読のつかぬラインと知りつつ

繁みよりすつくと伸びたる夏水仙さはやかに咲く毒を秘めつつ

獅子舞の草鞋の藁を掃きをれば昨夜の舞の激しさ残る

八月の盆も祭りも過ぎし夜は虫の音しみて秋近づけり

獅子舞の次代を担ふ若者の雄姿まぶしく伝統を継ぐ

長谷川 剛 山形

亡き父の語りし悲惨なシベリアの情景浮かぶ終戦記念日

炎天下ランドセル開けて日焼け止め取り出し塗りて微笑む少女
夜明け前空かけめぐる稲光りかみなり雨が地上をたたく
稲穂垂れ赤とんぼ飛び山里に暑き夏終えて秋来るを告ぐ
電子音が風呂湧きたるを告げたれば機械のごとくわれ立ちあがる
軒下に木乃伊のごとき巣がありて大雀蜂ら辺りをさまよふ
華やかな音色げ宙を舞ひ跳ねる周防亮介のヴァイオリン

長 澤 千恵子 山形

大石田の千本だんご子の土産たれたつぷりとなつかし旨し
夏祭り笛太鼓にて獅子が舞ひ雨にぬれつつわれ浮かれたつ
笛を吹く孫と同年の青年が良い音色にて祭り盛り上ぐ
大根の種蒔きてより五日目に二葉の出でて気持昂る
バラの花の上に乗りたる青蛙じつと動かずうつとり顔で
早生栗の鬼皮剥がし渋皮煮甘み控へて皆と分け合ふ

児 珠 純 子 山形

血糖値少し高めのわれに来る健康福祉課からの案内
年五回ウォーキング教室開かれて熟年世代の参加者多し
歩数計買はむと家電量販店健康グッズの売り場を探す
夫とわれ揃ひで買ひたる歩数計白とピンクでストラップ付き
シンプルで文字の大きな歩数計ポケットに入れ記録始むる

3Dセンサー付きの歩数計家事で動けば五千歩になる
釣り人が一万二千歩歩いたと岩魚見せくる朝日川沿ひ
十メートル先から届く甘き香はもうすぐ桂があるとふ知らせ
ハート型の青葉見上げて深呼吸キャラメルの香のする桂の下で

松 田 忠 一☆ 山形

若き日々は敗戦から起ちあがる日本の復興の意気高らかなころ
旧友と杯かさねれば追憶と月影冴えて愁いをかたる
熱き夜荒獅子が舞う吠えて舞う豊穰平安祈りをこめて
しばみゆく祭りの文化を絶やさじとこの年もまた受け継がれゆく
十六夜にたたずみ居ればそちと静寂に透る鈴虫の声
虫の音に癒され居ればそこはかとなく明日への希望に誘われゆく
ゆく秋の散居集落みわたせば薄黄緑の稲穂垂れ揺る

河原木 光 子☆ 広島

朝六時西楽寺の鐘低く聞き町内一周軽く汗かく
この夏の葡萄の収穫楽しみに二人で棚にビニール張りする
公園のラジオ体操の人ら散りレーキにて草をすく人のあり
改修の医院の垂れ幕目にとまり「営業中」にモヤモヤとする
断捨離と聞きたちまちにうかぶのはバイク四台布ケース二つ
バケツにて庭の水やり続け来てシャインマスカット五十房実る

七月の冬雷読めばその中に桜の歌の十四首あり

玄関のシャコバサボテン真白なる花三つ開く夜半に戻れば
数多実をつけたる庭の桜桃の夏を過ぎついに枯れてしまいぬ

鈴木裕子 ☆ 千葉

たった3回、たった五分、「たった」の山に溺れる一日

吹きおこる秋のそよ風肌の冷えマグにそそいだ茶の湯気に寄る

昨日までただの土色寂しげな道に忽然と曼珠沙華咲く

三大と称うる行列よそ目にし職人はただ鯛焼きを焼く

暑がりな母が小さく寒いと言う祖母のスカーフ似合う時来る

梨農園の店主が語る早き秋次の種類がもう実りおり

農園の友の苦労を思いつつ梨をただ美味しいと思う幸せ

和田妙子 山形

二ヶ月に一度の女子会それぞれの人生語る楽しきひととき

女子会を終へた日の夜ラインにてまだまだ続く楽しきときが

薔薇一輪夏の名残るか秋なのか花はきれいにただ咲いてをり

連日のコンサート行き楽しけれど老いたる我に疲れの残る

倉田ひろみ ☆ 広島

子守りより解放されし日曜日ひとりふらりと映画を観に行く

広島へこだま号にてのんびりと弁当を食べ旅行気分

構えたるカメラ小僧よ何を撮る新尾道の上りのホーム

『ワンピース』仕様のこだまの車窓より駅ごとに見る撮り鉄君たち

街中へまっすぐ下る路面電車新駅ビルの二階を発ちて

乗りたるは被爆電車と同じ型夏の終わりをゴトゴト走る

ゆく河の流れはもとの水じゃない目当ての店のない本通り

広島のスロンシネマの壁の絵は邦画洋画の主人公たち

暗くなり上映まではあと少し友の勧める韓国映画

塩野伸 山形

雨上がり玉砂利踏みて墓参り鯛鳴きて夕暮れ迫る

夏風邪を拗らせて医者に通ひをり免疫力も徐々に衰ふ

鬱蒼と繁れるままの廃屋を訪ねてみれば蜘蛛の巣阻む

コンビニに涼む束の間癒されて要らぬハンカチレジにて求む

遠き日に瑞井に語る父在りき話し掛けたき今父は亡く

駒草は蔵王の峰の邪魔をせず足元に咲き登山者癒す

鈴木知子 ☆ 埼玉

曇天に並ぶ向日葵俯きぬ陽射し差さぬを嘆くが如く

高原の空に漂う鰯雲萩も咲きたり移ろう季節

晩秋に花を探して木道の八島湿原ゆるりと歩む

武蔵野の面影残す広き庭木々に囲まれギャリー開店す

雑居なる名前を付けたギャラリーに祝いと共に作品納む
布を裂き杼に巻きつけて箴を打つ裂織りという素朴なる織り
経糸に合う布選びて細く裂く古き布ほどふんわり織れる

高橋 睦 夫☆ 茨城

洪水を幾度も越えて四万十の暮らしを支える沈下橋あり
明治期に築かれしという豊稔池今も讃岐の田を潤せり
ネパールとチベット襲う土石流荒ぶる地球は人類に牙むく
台風十五号わが茨城に上陸か心急きつつ簾巻き上ぐ
傷に塩塗るが如くに今日もまたゲリラ雷雨千葉に降りたり
「まさか」が現実に起きたる千葉豪雨忘れまじこの地も例外でなし
いつもの時間にいつもの食事孫帰り夜はゆったり入浴できる

大澤 幸 子☆ 東京

救急車呼んでも来ずに妹が姉を殺害す老老介護の事件

鋭い目鷹が獲物を掴まんとスピードあげては光る爪あり

鋭い目勝負に挑む鷹のよう横綱相撲大の里関

高所恐怖症テレビを見ても恐さくるスカイツリーの展望台は無理

朝きたと目覚まし時計鳴っている四十年も母は鳴らして

元氣よく毎朝テレビで天気予報アナウンサーは笑顔で伝え

(☆印は新仮名遣い希望者です)

九月号 十首選

作品一

石渡 静夫

作品二

大塚 亮子

作品三

天野 克彦

悩みつつ無心に草を刈りたれば振り向く畝の
輝きを見る 正田フミエ☆
出来ぬこと考えるのは無意味なり手にあるモ
ノに感謝をせねば 浜田はるみ☆
わつさわさ柴犬の毛は抜け始め一回りも痩せ
夏に備へる 村上 美江
悪法が雪崩の如く決まりゆく暮しを嘆く民の
頭上で 須藤 紀子
星型になりつつ閉づと知りてよりなほしたは
しき野辺の屋顔 佐藤 靖子
行くところ無くて誰かれ会はぬ日は電話して
をり用事無けれど 齋鹿ミヤコ
オランダとドローでよかったサツカーで皇室
外交和気あいあいと 植松千恵子☆
小さな実毎日水やり赤む待つさやかなるは
夏の楽しみ 川俣美治子☆
朝毎に身の重さ減り戸を繰れば猛き青葉の風
薫りくる 小林 貞子
梅雨時のたのしみとして秘め置かむ紫陽花ひ
そかに育つこの朝 本間志津子

水割りの氷を回す音軽く胃カメラ事なき今宵
の夫 佐藤 幸子
折られたる庭の計の木逞しく伸びて大きな葉
の数増える 東 ミチ
蛍飛ぶあの湧水で米作り弥生時代に先人達が
山本 述子
留学生ツンツルテンの浴衣きて線香花火見詰
めおりたり 立石 節子☆
我が過ごしし街なかに知る人はなく五十年前
の道ただ歩みゆく 野口 秀子
歳重ね眠る時間の多くなり犬のボールの生き
るにちにち 藤田 英輔☆
米作り八十八の手間ひまの幾つか為しき幼き
われも 藤田 夏見☆
畑仕事終えて帰宅の夕空に月と金星ほうびの
ごとく 塚本 節子☆
我を知る弟の呉れたる花鉢は手間の掛からぬ
ガウラとランタナ 井出 裕子
歩き来てほっと一息ついた時暑さ忘れる鶯の
声 首藤 文江☆

ひっそりと芭蕉の句碑と石仏と菖蒲の園の片
隅にあり 後藤 恭介☆
農道にシロツメ草繁茂して山羊さん食べると
妻は言うなり 越澤 太朗☆
萌葱色の麻の暖簾に掛け掛け替へて猛暑の夏
に広く涼やか 今野 澄子
国道のなだりに広がるぶどう棚朝日をうけて
煌めきてをり 長谷川 剛
届きたる真赤に熟れたさくらんぼ口に含みて
心のなごむ 長澤千恵子
最上川の流れの見ゆる丘ありて遠く残雪の朝
日岳も見ゆ 児珠 純子
たえずみて居ればすべての想い出の溶けゆく
ような落日の海 松田 忠一☆
世の中の平和を願い鐘鳴らす平の海の引き上
げ棧橋 河原木光子☆
茹でたての枝豆好きは父譲り殻を積みつつ亡
き父想う 鈴木 知子☆
初採りのきゅうりに少し味噌つけて妻と飲む
酒は夏の幸せ 高橋 睦夫☆

■石川幸雄歌集

『小説の中のわたし』

令和八年六月二十日発行、一章五〇首、四〇〇首のすっきりした仕立てで、屏ごとに自作と考えられる画が表紙絵等も加えて十一點添えられ、いろいろ想像できることが楽しく、才能が羨しい書である。第五歌集か。「詩歌探究社 連」代表。日本短歌総研上席研究員等等。

各章から少しずつ挙げてみた。

歳時記に「3・11」載せよという言葉は春をいよいよ殺す

俺たちが良き友達でいるために目を見て言わずなにも聞かざる

沸騰後12分の茹で具合 七十代のハードボイルド

栈橋にクロダイ寄るを覗きつつ夕暮れどきの潮は満ちつつ

手の甲をさする手のひら寒寒と老いれば人は樹のようになる

このオレを六十代に括りたるアンケートなど答えるもんか

綱引きの親と子のこえ山の上の小学校に聞こえて泣ける

結末を知る安心感に導かれた観はじめる『Noring Hill』

濡れて立つアオサギ雨を呼ぶヘロンだみ声のヘロンさよならヘロン

エアコンにリモコン向けてスイッチオンするとテレビが点いたりビンダ

右、一筋縄でいかないような、寂しがり屋のような、皮肉屋のような、詩のような歌だと感じた。最後に自ら率いる仕事の場面を挙げてみる。

図面には描いてないから非はないが相手は客だと職人に言う

週末は「上がり仕舞いにしようや」とおっさんくさい物言いとなる

(株式会社 飯塚書店刊)

■阿部真太郎歌集

『うなぎのくわんづめ』

令和八年六月二十五日発行の第一歌集で五四九首を逆編年体にして、「詞楽」主筆「歌のまれば」と同人、「RENGA花莫座」連衆他。

妻子を思う歌からは地域に親しむ姿が見え岡野弘彦師を詠えば自然や神仏や人への愛情

の広がりを感じる。歌集には全体にホットな空気が流れている。

子の成長を見ながらの日日。

S A P I X から次の習ひ事まで十五分。

わが娘を乗せて駆ける自転車

『源義経』『北条政子』七歳の娘の読書偏りてをり

ありがたき電話切りたり わが娘は 大だ師・新能の舞台上が

娘は翔太 翔太はいろいろは好きといふ事情聴きつつ若鶏揚げる

仲良しの一心くんにも気づかれず サンタクロースにわれはなりたり

集中に、北杜夫が茂吉の遺骨を六十九年間に置き供養していたのを、ふるさとの金瓶に埋骨する歌があり、色々用を足した様子があり、次の歌は鹿児島まで行って岡野弘彦師の歌碑建立にも力を尽した時の様子である。鎮魂の歌碑ひかりたつ庭に入り わが師のこゑのふいに聴こゆる

伊藤一彦 川涯利雄 あひよみて 背低き歌碑の姿みつむる

再開発に反対したが。良心は傷むことなし 街ひとつ高層ビルに建てかはりたり

不動産屋の怖さを知らず受け取りし虎屋の羊羹やり場うしなふ

今でも子を持つ女性には職場で働きにくい。ふた月のあひだに此処を出でゆけと子どもを持てる女性を許さず

(公益財団法人 角川文化振興財団刊)

■三友さよ子歌集

『白き水脈』

令和八年七月二十四日発行の第三歌集で、四七〇首を収めている。第一歌集では埼玉県歌人会新人賞を受賞、現在「花實」代表・編集発行人。いかにも爽やかな印象のタイトルは下記の一首より。「はつ夏の光かがよふ海原に漁船か白き水脈を引きゆく」。これは千葉の海、著者は埼玉県人で、川的面積が日本で一番広いという、水の豊かな地に住み、次のような歌がある。

雪解けの水豊かなる川の面が鱗に似たる風紋拡ぐ

城跡などたどるにしても、心満たされる景色が広がる。

城跡の土塁などりを紫に染めてかがよふ三界草は

産土の杜のなだりをむらさきに染めて人

呼ぶ花だいこんは

北帰行始まりたるか鳥の影あらぬ河原に温き風吹く

折ふしの著者の、事実を前にしての楽しい空想。

切りゆくに次々みどりの星生まれ天の川なす夕食のオクラ

近く啼く雉子招きたき思ひなり円座に似たる「きじむしろ」生ひ

平和を願う。

あまたなる侍女入水せし荒川の「お万が淵」の水やすらし

第三次世界大戦来ぬことをひたすら祈るも映像惨し

旅をして異国に触れて親しみを広げていく人の歌だろうと、次の歌を読んで思った。黄砂といえども。

ゴビ砂漠タクラマカンの砂なれば煩はしくも愛しき混じる

花の色いろいろその変名や鳥の数かずその彩りまた虫として生きるものすべてに囲まれている著者を感じた。

(花實叢書第182篇 公益財団法人 角川文化振興財団刊)

短歌総合紙・月刊 年間定期購読6000円(税・送料込)

うた新聞

おかげさまで創刊14周年!

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集 全国各地を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・

歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。

●お申込みは、いりの舎まで

〒一五五〇〇三二 東京都世田谷区代沢五三二五 シルボ下北沢四〇三
電話 〇三六四三二八四二六 ファックス 〇三六四三二八五二六
メール chumon@rriofsha.com

斎藤茂吉の書

～その原点をさぐる～

主な展示資料

■斎藤茂吉の書

陸奥をふたわけざまに登えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ(全紙)
紅葦の雨にぬれゆくあはれさを人に知らえず見つ来にけり(半切)
松かぜのおと聞くときはいにしへの聖のごとくわれは寂しむ(短冊)
山のべににほひし葛の房花は藤なみよつもあはれなりけり(色紙)
みちのくの蔵王山なみにある雲のひねもす動き春たつらしも(色紙)
最上川のながさに居れば対岸の虫の声きこゆかなしきまでに(色紙)
写生道(全紙)/山太古(半切)/「斎藤茂吉全集」題字下書き(半切)
正岡子規三十三回忌歌会歌稿二首(半切)

■斎藤茂吉の書簡

門間春雄御母堂宛書簡 大正5年7月31日

■斎藤茂吉の書籍

歌集『あらたま』

『斎藤茂吉全集』

■斎藤茂吉の旧蔵品・その他

梧竹臨写帖/書道道具(硯、筆、矢立等)/印章

中林梧竹 片仮名字帖

■文人の書

森 鷗外 七面鳥酒也。朝露飯也。酒以酔人。固可。飯以飽人。
亦無不可。況香積之飯。非常所有乎。

幸田露伴 春の鳥阿けぼの桶をはなれけり

中林梧竹 大聖文殊菩薩

※実際の展示では、表記および展示物を変更する場合があります。



公益財団法人

斎藤茂吉記念館

◆創業1948年、詩歌と共に78年！ 伝統と信頼の飯塚書店が出版する短歌関連書◆

【最新刊】

花鳥風月の短歌

コレクション2000

日本短歌総研編著 四六判208頁 1540円(税込)



短歌様式と不即不離であった花鳥風月を「風雅」という域に留まらず、歴代の名歌はもとより、時代時代の思潮や文化の特質を反映した作品品〇〇〇首を、現代という枠組に据えて採集しました。

比喩の短歌コレクション1000

日本短歌総研編著 1540円(税込)

恋の短歌コレクション1000

日本短歌総研編著 1430円(税込)

固有名詞の短歌

コレクション1000 日本短歌総研編著 1430円(税込)

形容詞・形容動詞の短歌

コレクション1000 日本短歌総研編著 1430円(税込)

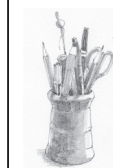
短歌用語辞典

増補新版

日本短歌総研編著 四六上製箱入536頁 4400円(税込)
短歌によく使われる用語の説明と著名歌人の作品を多数引例他に類書のない実作者必携の辞典。見出し語二〇〇四・引例歌七三四首

【ご購入は近くの書店か直接小社まで。歌集出版も承ります。】

編集後記



▽毎月届けていただく「冬雷」を手
にしていると思うのは作品欄の活字
が大きくて読みやすいことである。そ
れでもしっかりと読み込む場合、私は
ルーペを使っている。いつの間にか
そういう年齢になってしまった。来
年度は会費も少し値上がりするが、
誌面は今まで以上に読みやすさを基
本にした編集になるそうで楽しみにで
ある。本号の巻頭にあるように毎月
新しい作品を作り発表するという意
気込みを大事にしたい。

▽『大友柳太郎歌集「渚」鑑賞』が
刊行されてから、著者大山敏夫氏が
四月号より補記を書いておられる。
その大友論がますます充実。本号で
の考察は「友」の異体字について。
古い資料に見られる「友」の右肩に
「レ」のある文字を不思議に思っ
ていたが氏の考察でその謎が解けた。

（桜井美保子）

▽今月は「香蘭」編集委員の市川義
和氏から新作五首を頂戴した。氏と
は互いの雑誌の交換に於いて度々の
文通等があった。「冬雷」はインデ
ザインでの組版ですか？と歌壇関
係から最初に問われたのが市川氏で
ある。この方はかなり研究されてい
るという印象を受け、以後交流を重
ねて来た。作品からは闘病中を思わ
せるが、ご快癒を祈念申し上げる。
▽ハヤトチリの失敗続きで恥入るが
大友柳太郎の名の異体字についても
早速に訂正となった。今回その文字
の存在資料が確認された。

▽本年一月号より設置された「冬雷
カウンター」だが、会員各自がこの
カウンターを確認しつつ一年頑張ろ
うというものであった。総数一〇七
名からの出発で、以後少しずつ減少
したものの、本号ついに一〇八名の
出詠を獲得し、「十一名」を刻むこ
とになった。これは予想を覆す結果
で大いに激励されている。あと一月
で本年も終わる。この勢いで来月も
この数字を確保したい。（大山敏夫）

▽今月の応接室にお出で下さったの
は市川義和氏。八十歳まで大きな病
なしで来られたことがすばらしいと
思いながら読ませて戴いた。私も癌
経験者の一人だが「長きながき夏」
に医師の指導をきちんと守り治療に
専念する一日一日の思いが集約され
ているようで心にくる。

▽厳しい暑さと集中豪雨に見舞われ
た夏が過ぎて朝夕の涼しさに少し
ほっとする。第六十五回冬雷大会は
誌上で開催なのでお会いすること
はできないが出詠作品に作者を思い
浮かべながら詠草を人力するのも楽
しい作業になっている。全員参加を
願っているのだが如何だろうか。

▽編集委員会の「お願い」に会費値
上げが載っている。七年ぶりの値上
げである。月刊を維持する為に大切
なことなのでご理解戴きたい。一月
から会費切れになった方の振込用紙
に新会費を記載しますので確認の
上お送り下さい。（小林芳枝）

▽寄附御礼

井上菅子 児玉孝子

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四
月一日創立した。（代表は大山敏夫）
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五
の九の四〇九 小林方」に置き、責任者
小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短
歌の道の向上をはかると共に地域社会の
文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行し、会員は「冬雷」
に作品および文章を投稿できる。ただし
取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発
行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七
大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出し、合議によって
「冬雷」の制作や会の運営に当てる。
- 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りと
し、六か月以上前納のこと。ただし、会
員本人の事情による途中退会の場合の会
費は返金しない。
- *会費は原則として振替にて納入する事。
- A 作品三欄は年額 一七〇〇〇円
- B 作品二欄は年額 二〇〇〇〇円
- C 作品一（冬雷集を含む）は年額 二四〇〇〇円
- D 維持会員（会員の申出により定まる）年額 三〇〇〇円
- E 購読会員は 九〇〇〇円
- *以上、二〇二七年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿でき
る。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型
を使用し、何月号、所属作品欄を明記し
て各作品欄担当者宛に直送する。原稿
用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じ
る。締切りは十五日、発表は翌々月号。
担当選者は原則として左記。
- 冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
 - ・担当 大山 敏夫
 - ・担当 桜井美保子
- 作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）
 - ・担当 小林 芳枝
 - ・担当 小林 芳枝
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏
名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に応じる。一通を返信用と
して必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を
表記した封筒に切手を貼り同封する。添
削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
白地に一首ずつベタ打ちにして、行間
も空けないこと。頭を一字分空けたり、
一首を二行に分断したり、余分な番号を
付けたら、色を付けたらしないこと。分
量の少ない場合は通常のメール本文、又
はケータイ・スマホでも送信可能。
- 一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山 敏夫 tourai-oozana@nifty.com
- 小林 芳枝 kyosie@nifty.com
- 桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026 年 11 月 1 日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷 編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷 短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>



小誌 QR コードです。
ここから入れます。

頒 価 700 円

今月の冬雷（冬雷カウンター） 出詠者数の動向

冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
32	32	28	16	108
(0)	(+ 1)	(+ 1)	(0)	(+ 2)

* 上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。